
真・恋姫†無双 OROCHI

フォン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 OROCHI

【Nコード】

N7044Y

【作者名】

フォン

【あらすじ】

初めて小説書きます…

一刀と及川の親友であるオリ主が遠呂智になって恋姫世界で頑張るお話

主人公陣営には恋姫で登場しなかった史実の有名な将をガンガン入れていきます
めざせ、完結！

海藤遊星（前書き）

本文書くより投稿することの方がくせ者

この小説には

オリジナル要素

少しのキャラ崩壊

が含まれます

ご注意ください

海藤遊星

「……………はあ」

俺は海藤遊星。聖フランチェスカ学園に通ってるただの学生さ
親友の一刀みたいにエロゲにいそくなイケメンな面はしてねーし
及川みたいにキャラが濃い訳でもネエ

俺が勝てんのは学力と身長だけだ

……………ルックスエ…

でだ。

今俺はガキににらまれてビビってるのさw
なんつーか、ガキの周りの気が全然ちげえ…
めんどくせえ…

「まあ、いいだろう…」

ガキが呟いたのと同時に俺の視界は何も見えなくなっただ…

ゆうせいは めのまえが

まっくらになっただ

……………レポートしてぬえ…

「……………起きろっ！」

ぐはっ！

「起きたな（物理）」

「いいなあ…左慈に蹴られるなんて…」

腹部に痛みを孕みながら身体を起こす俺

目の前にはあの時のガキ

そしてもう1人誰かいるな…

とりあえず

ここ…どこだ？

邂逅、左慈と于吉

やあやあ、遊星だよ

いま俺がいるのは

地面が透明、空は不思議な色合いをしている亜空間とも言つべき所か

…ゼロ時間かよ…

まあ、それよりもだ

「俺は左慈。そしてこいつが「左慈の永遠の恋びとあべっ！」于吉だ」

美しい裏拳を決めながら自己紹介をした左慈

5

えと…俺は海藤遊星

とりあえず自己紹介

「遊星、貴様、北郷一刀は知ってるな？」

「ああ、一刀は俺の親友だてか、待ってくれ！

ここはどこだ？あんたら左慈と于吉って言ったよな？それって三國志のあのか？いやいやいや…まさかゲームや小説でもあるまいし…」

「うるさいやつだな…」

左慈がぼやく

「まあまあ左慈。遊星はなかなか頭がきれる人間です。私が言葉で納得させますから、殴るのは私だけにしてください」

そう言うと于吉が俺の目の前に飛んできた

蹴られたのか…

「ハア 左慈ったら激しいんですから。さて遊星、あなたの質問に答えましょう。私達はあの左慈と于吉です。ただし、三國志の平行ワールドで、のですがね。」

平行ワールド!?

たしか平行世界だかi fの世界のことだよな…

「話を続けますね。その平行三國志に北郷一刀がイレギュラーとして入ってしまったのですよ
それによって史実と違う結末で魏が統一してしまうのですよ。」

一刀なにやってんだ…

史実と違う結末…?

「例を挙げれば、赤壁の戦いで曹操が負けず、そのまま天下統一します。」

は?

赤壁つちゃあ映画にもなる大決戦だよな

史実と、違う未来か

一刀のせいだ…

「そこで貴方に、歪んだ歴史を戻して欲しいのです。分かりますか？」

なるほど、だから俺はここにいます

「俺に！？どうすりゃいいんだ！仮に方法あっても、俺なんか出来るわけないって！」

正直、こういう異世界召喚モノは大好きだ

けど、自分が主人公でだなんて、無理に決まってる。

「わかってますよ。あなたに乱世を生き抜く力がないことぐらい。

北郷一刀は主人公補正なるもので運良く曹操に助けられ、常に周りには彼を慕う人物に溢れていました。が、貴方は未知数。どうなるかは私達も知りません。なので貴方に力をあげましょう。」

「……………」

俺は黙ってしまった。

俺の中の好奇心が今爆発している。アドレナリンが湧き出ている。オラ、ワクワクしてきたぞ！

「この話、受けますよね？」

「……………受けるよ」

俺はそう言った

信じられない話だな

「よかった。あなたが受け入れるまで帰さないつもりでしたから。私としても左慈との愛の空間に遊星がいても邪魔でして。それでは左慈、仕上げdあべしっ!」
「死ねっ!」

また于吉が飛んでいった

「さて遊星、行くからには相応の覚悟が必要だが、分かってるか？」

うん…これから行くのは血の臭いがする見知らぬ世界

「分かっているッ!」
力強く言った

「ふん…その覚悟、本物であるかどうか…確かめさせてもらっぞ」

俺の目の前に青竜刀が現れた!

ええええええええ

これが仙術かよ

チート乙

そして目の前に1人の兵士

そいつを、倒してみる

左慈はそう言ったんだ…

やるべきことは

「ま、こうなるか…」

兵士が剣を振りかざし突撃してきた！

青竜刀を手に取る。

ひんやりとした金属の感触うつ…生々しい

「けどさっ！」

兵士の剣が振りおろされる

見切ったア！

身体を右へ反らし

切り裂く！

青竜刀が兵士の顔を薙ぐ

兵士はそのまま倒れた

「ふう」

チュートリアルでの戦闘でなんか、負けてられねーっつの

「ほう、お前人を殺すことに躊躇しないのか」

左慈が少し驚いた様子で口を開く

「ん？ま、いい気分じゃあねーが、そこんところは割りきらねーとや
つてらんねーだろ？一刀は剣を持たなかつたのか？」

戦国の世で剣をもたないなんてそんなわけ…

「あいつは直接人を殺めたことはない」

「竹刀なら黄巾のやつらに向けましたね。」

于吉おかえり…

一刀は優しいから流石だといいたいが…

甘いぞ一刀！

リバーズカードをオープンしそうだ

「于吉、遊星なら能力をやっても大丈夫か」

「そうですね。遊星なら大丈夫でしょう。」

お？ついにか！？

キター（。。。！）

「遊星、あなたに能力を差し上げましょう。どれがいいですか？」

？公孫淵

？金旋

？淳于瓊

？曹爽

うわあ…

凡愚しかいねええええええwwww
つか能力をくれるんじゃないかって憑依じゃねーか…

「嫌だっ！司馬懿に「滅せ…」とかいわれたくない！
金旋…はまあ性格俺ならなんとかなる…かもじゃなくて、地味すぎる！」

烏巢で焼かれたくない！つかさせねえ！袁紹に訴えてやる！！あ、でも袁紹って優柔不断なんだっけ…
曹爽とかもう赤壁より全然後じゃねーか！何より凡愚だろあいつ！

(その時遊星に電流走る)

そつだ遠呂智にしてくれ！今考えついた！」

「今の選択肢は冗談ですよ。マジレス乙ww」

イラッ (^ ^ #)

「とまあ、遠呂智ですか？いいですけど、大変ですよ？では…」
「ふうっ！」

左慈と于吉が俺に術をかけているのだろう。体が青く燃えだした。なにこれこわい

青い炎が体を燃やし尽くしたと思ったら、
「うお！？」

体から力が湧いてくる。

炎が消えてゆくのと同時に俺の体に鎧、兜、脛あてなどが現れる。
すべての炎が消えた。
そっと目を開く。

「すっげえ……」

俺はまさしく遠呂智になっていた。俺自体が変わってるのは、気と
いうか、体から感じる力だけか。肌もグレーになってないし。于吉
が鏡を出した。お！オッドアイになってる！俺カッコイイ！

足元には遠呂智の武器 死神鎌「焦喚」が置かれている。

「さて、あとは乱世であなたが歴史を正せばよいだけです。」

「おう。具体的には何をすればいいんだ？」

「そんなの決まってる。」

左慈がだるそうに言う

「北郷一刀を……消せ」

出会は殺伐と(前書き)

よく見たら私かなり文章すくないですね…
次からたくさん生産します…

出会いは殺伐と

ま、こうなる可能性はわかったちゃあいたが…

「……………分かったよ」

「ならもう行け。于吉」

「はい、左慈」

于吉が術を唱えた

「いいですか？しつかり北郷一刀を消すのですよ！わかりましたね
！」

「于吉、一刀に恨みでもあんのか？妙に感情的だな
俺がなんとなく問う」

「ええ！あの泥棒猫はっ！左慈と2人きりで！夜中に外でキャツキ
ヤウフフとイチャついていて（ごぶっ！）」

「もう死ね！」

「…ぜえぜえ…左慈もっ！私に見せたことのない顔でっ！ぐぶっ！
あの男とっ！一夜を過ごしたと思うとっ！あっ！左慈そこはダメで
すってば…ああ…」

「于吉…お前のこと、忘れないぜ…」そこで俺は謎の空間から姿を消した。

ぶわりと風を吹かせながら俺は着地した

どうやら本物の大地にきたらしい。ここが後漢の中国なのか

「貴様いま何をした！」

突然後ろから声をかけられた

「ん？」

振り向くとそこには剣を構えたすごいべっぴんさんが。ほえ〜中国にはこないな美人がおるべか…

剣士だからだろう、ブラウンの髪はまとめられていて、おろしたらまた綺麗だろーなあ

鎧とドレスを合わせたようなものを身に付けていて、手にもつ剣からは…あんまりいいオーラはないな？なまくらよりはという感じ

どっかでみたことあるような…

「沈黙か、それでもよい、すぐに切り捨ててやる…ハッ！」

女剣士が突っ込んでくる！いい気迫だ。だがあんたには何より

ガギーン！

「なっ！」

容易く受け止めた俺に驚いたのか、表情が変わる。かわいい。

速さがたりない！

そのまま剣を弾く

キーン

「ふっ！」

かわいい剣士は俺から距離をとった

「ああっ！トランザムも出来るようにしてって言うの忘れてた！」

「は？」

再び困惑する戦乙女（仮）さん。美しい

「我は遠呂智。この国を変えに降臨せし魔王」

遠呂智様っぽく言ってみる

「降臨？もしや天の御遣いか？いや、天より来たのであれば死神鎌
なぞ持つはずがない。やはり妖術で人をたぶらかす妖魔なのだろう
！ここで成敗する！」こいつ脳筋かww

「貴様：私を笑ったな！？生きて帰れると思うなよ！」

え？表情には出していないのになぜ分かったし！？ポーカーフェイス
の神（自称）の俺が読まれるとは：まさか！？ニュータイプか！

「はあっ！瞬迅剣！」

んおお！？

強烈な突きが俺のいた場所を貫く。なるほど、魔神剣より瞬迅剣派か

「次はこっちの番だな！」

鎌を振りかざし…

「チャージ1！」

そのまま地面に打ち付ける！

地面に衝撃波が走りそのままかわい娘を吹き飛ばした！

嫁にしたい娘（もはや誰だ）は木にぶつかってそのまま動かなくなつた…

「ああっ！やりすぎたか!？」

どうやら身体能力も爆発的に高まつてるみたいだな。考えてみれば瞬迅剣を俺がよけられるはずがないし。

よしまずは嫁（違います）を休ませてあげよう。

はっ！これは！

宿まで…

？おんぶしていく

？お姫様だっこ

？引きずる

？無視する

うおおっ！

また鬼畜な選択肢があっ！お姫様だっこだと!？俺を萌え殺す気か!??は鬼か！サドの魂は俺にはない！

「…おんぶだな…」

よいしょと

良かった、そんなに怪我はなとそつ…ん？

なんということでしょう

「胸…ないな」

拠点フェイズ 程遠志（大嘘）（前書き）

遊星遠呂智の能力説明

チャージ攻撃の属性攻撃は莫大な「気」を使って行う

その際、感情に属性が左右され、気を込めるほど威力が強くなり、強く願う程属性威力が上がる

「殺気」

これをこめないとひとを殺せない。

「情熱」

炎の属性が出る。

拠点フェイズ 程遠志（大嘘）

「よし、着いた！」

名も知らぬ村に到着！と

ちなみに今の俺の格好はフランチェスカの制服。鎧とか、指はつちんで消えるんだぜ？かっこいいー！しかし人目は盗んで装備しないと
な…

宿にチェックして一部屋借りる。宿泊代なんてもってないから、明日からここでバイトだな。

「汚ねえ部屋だなあ」

空気がどんよりしていて、部屋全体が黒っぽい…

早速店から道具を借りてお掃除開始

かわいい剣士はベッドメイクした寝台へ

あ、なんかいいにおいもする…ハアハア

え？いやいや、変態だなんて失敬な。紳士のたしなみですよ？TA

S I N A M Iですつてば

ここから呂布のテーマ

いやああああ！

ゴ…ゴキブリだあああああ！

…遠呂智、士気低下！…

くっ！まさかここで奇襲とは…しかしここで終わる俺ではない！

パチン！

死神鎌「焦喚」をだす

R1無双消費必殺技！

「楽にしてやるっ！」

ドゴオオオオン！

分身して焦喚を盛大にふりおろすだけという地味な技だが、なかなか威力あるな…

奇跡的にも床に穴が空かなかった…

はっ！呂布…じゃなくてゴキブリは！

しっかり死んでいた。

箒でささっと外に出してつと

あとは蜘蛛とかいたけど気にしない

蜘蛛はかわいいだろ！いい加減にしろ！

そして数刻後

なんとということでした（ry

美しく生まれ変わった宿の一部屋がそこにありました。

そんなとき女将さんが料理を持ってきてくれた。ナイスタイミング。

女将さんはなにやら凄く驚いた様子で部屋を見渡し、「あなたこそ、真の三國無双よ！（掃除に関して）」

と言っすたすた行っすたしまっすた。

「うう…」

んお？ 姫の目覚めかな？

「おはようございます。っすも昼ですけどね。」

「えと？ おなたは… はっ！ 妖術使い！ ふんっ！」

ひでぶっ！

いい右ストレート… こいつ… 助けてやったのに一方的に話すすめやがって… 痛い… いやいや、ここは冷静に、超クールだよ俺！

「待っすてくれ！ 俺はあなたに危害をくわえたりしない！ むしろ味方だ！ まずは俺の話聞いてくれ！」

「妖術使いのいうことなんか信じられるか！ 私になにか術をかけたっりしてないだろっうな！」

ありゃりゃ…

どうしたもんか… ん？ 外が騒がしいね。

DON そうな男「おうおう、うまそうな饅頭だな。ほら寄越せよw」

饅頭屋のおっちゃん「あのその… 代金…」

チビ「ああん？俺らから金を取るってかあ？こいつが見えねーのか？おい」

ギヤリン！

あのチビまさか抜刀するとは…おっちゃん剣見て青くなってるし…
つーか饅頭って孔明が作ったもんだよな？なんであんだろ…

デブ「おらおら、道をあけるんだな！程遠志様のお通りなんだな！」

ん？程遠志？黄巾賊の将で関羽だか張飛だかに一発で沈んだザコキヤラじゃん？あの先頭の少し豪華な装飾したおっさんか

程遠志「野郎ども！この町も食らい尽くせ！金を奪え、ガキを殺せ、女をさらえ！うひゃひゃひゃひゃw！」

おっと、まさかあのまわりに百人くらいいる黄色い布まいてるやつは…

「黄巾賊かつ！」

「何！？黄巾だと！？」

「俺の馬鹿！なぜもつと早く気付けなかつたんだ！」

部屋から飛び出し、指をならして遠呂智になる

程遠志「さあ！行けえ！」

黄巾賊「いえええええ！」

間に合え！

死者がでるまえに！
うおお！

「ダツシュ攻撃！」

「ぎゃああー！」

まずは1人！

「チャージ1！消し飛べ！」

「うわああー！」

まとめて何人が吹き飛ばす。殺気をこめて撃つたからまともにくらえば内臓が破裂したり、腕や足がつかいものにならないくらいに衝撃波は撃つたはずだ。

「この…化け物が…」

死に損ないの賊が口を開く

「化け物？…違う、俺は悪魔だ…」

ブリー、セリフを借りるぜ

「ぎゃあー！」

死に損ないが悲鳴をあげ絶命した

それを殺したのは目の前のこの少女

カウボーイな格好と頭に合わず大きめなカウボーイハットに隠れる
鮮やかな黄緑の髪

手には剣を持っている

「賊と戦っているのでしょうか？」

少女が聞いてきた

「ああ」

「なら、手を貸しましょう。」

なんだかよくわからんが味方ゲット。

「俺は遠呂智。君は？」

「単福と呼んでください。」にこりと少女がいった。

…徐庶さんチーイス！

「わかった、単福ちゃん。俺に力を貸してくれ。」

「了解です。村に散らばった賊どもは私にお任せください。遠呂智さんは程遠志を討ち取ってくれますか？」

「なるほど、確かに頭がやられたら賊の動きも鈍るか」

「そういうことです。では参りましょう！」

「おう！」

走り出す俺

ん？あれは…

くくくく

剣を探すのに時間をかけてしまった。

黄巾賊が群がるなか飛び出したあの妖術使いを追ってわたしも賊と戦闘を開始した

「女だあ！いい女がいるぞ」「なかなかの上玉じゃねえか？胸がないが」

「程遠志様！いい女がいますぜ！」

賊のグスイ視線をあびながら、私はそいつらを斬り伏せるべく剣を構える

「はああ！」

斬り込む！凧ぎ払う！突き貫く！

また1人1人と賊を減らしてゆく…が

「はあ…はあ…」

きりがない…10はとづくに越しているはずだが…

程遠志「ひゃひゃわ！もう終わりか？ビュン！ザシュ！

「ぐっ！」

矢を射たれたか！不覚…！

「隙ありイ！」

ギャリン！

しまった！剣を弾かれ、黄巾賊の足元に転がっていった。

「おい、こいつ気絶させて持って帰るぞ！」

「うへへw村にきたかいがあったってもんでさあ」

…何をしているんだ私は…

私は両親を黄巾賊に殺され、復讐を生き甲斐に剣をとった。町一番の剣士になった。なのに！何故黄巾賊ごときに負ける！何もかもに絶望した。

ここまでか…

「どうしてそこで諦めるんだそこで（）。（）！」

ドゴオオン！

黄巾賊が吹き飛んでいった！

「だめだめだめ諦めたら！だからこそ！」

妖術…使い…！

「もっと！熱くなれよおおお！」

「うわあああ！アチいい！なんで炎がでるんだあ！」
私を囲んでいた賊が燃えていた…

どうなってるかわからんが…

「味方…なのか？」

妖術使いを見て呟いた。

~~~~~さっきの暴力剣士が黄巾の奴らに囲まれてる。！まずい、黄巾弓兵が暴力女を狙ってやがる！

ビュン！

「ぐっ！」

ああ！右足に思いっきり矢が刺さった！

「隙アライ！」

ギイン！

程遠志の一撃が暴力女の剣を弾いた

あーあ…

ええ！表情変わりすぎだろ！急にくらい顔になりやがって…これじやあ好きにしてくださいと言ってるようなもんだろ！

助ける義理はない…が女の子のピンチを無視するのは綺麗じゃねよな！

「ここまでか…」

はあ？諦めるんか？

「どうしてそこで諦めるんだそこで。。。」「！」

ドゴオオン！

黄巾賊が吹き飛んでいった！

「だめだめだめ諦めたら！だからこそ！」

「情熱」の気を混ぜて打つ！

「もつと！熱くなれよおおお！」

「うわああ！アチいい！なんで炎がでるんだあ！」

決まった…（どや顔）

「味方：なのか？」

暴力女が呟いた

はあ〜

「だから、そう言ったたろうっ？ほら、黄巾潰すから手を貸せよ。足

大丈夫か？」女の剣を拾って渡す。

「ああ…これくらいなんともない。」

「なら、行こうぜ。そろそろ飽きたぜ…程遠志ィ！5秒で消してやる！」

程遠志「ひい！」

「弱者は無用…消えよ！」

ザシュツ！

程遠志をひとふりで倒した。

「すごい…」

暴力女が驚いている。そんなにすごいかな？

あとはこれを賊に知らせれば単福ちゃんの手はほぼ成功つと

聞けい！黄巾賊ども！

「敵将、討ち取った！」

遊星、仁王立ちする(前書き)

作者は

二コ厨なので

いろいろ

ネタを混ぜて執筆します

わからない方ごめんなさい無視してください。

「悲壮」

氷の属性をつける

「驚愕」

雷の属性をつける

## 遊星、仁王立ちする

程遠志を失った残党（といっても20人いるかどうかまで減っていた。単福ちゃん強し…）は逃げ散りはじめた。幸い、怪我人はいたものの死者は出ずにすんだっばい。やったぜ。

「遠呂智さん」

やあ単福ちゃん

「お疲れ。単福ちゃんのお陰で追ひ払えたね。」

「私は何も。遠呂智さんこそ、一騎当千の猛者とお見受けしました」

か…かわいい！暴力女といい、美少女が多すぎる！古代中国おそるべし…

村人のみんなも安堵の表情を浮かべている。俺と単福ちゃんにお礼までしてくれた。人助けはするもんだね！

そんなほのぼのしていると「大変だー！皆逃げろー！」という村人Aの叫び声

「どうしましたか？」

「ああ！助けてくれた嬢ちゃんか！黄巾の軍団がこっちにきてんだ！さっきの数なんかの比じゃねえ！はやく逃げるぞ！」

「！しまった！近くに黄巾の拠点があったのか！」

程遠志なんて（黄巾の中では）有名な将だ。少人数でぶらぶら放浪しているなんてまず無いよな。

「この近くに董卓という方が治めている都があります。そこまで逃げきりましょう。」



単福ちゃんが提案する

董卓…正史では都を治めてからの彼の評判はあまりいいものではないけど…

ゲームみたいに

「クズどもなぞ受け入れるわけないじゃろ！全員、死刑じゃあ！」とか

「ほほう、単福とやら、なかなか将来が楽しみな美貌じゃのう…ワシに仕えるなら、受け入れてやつてもよいぞ！」

みたいなことになったらやだなあ

「董卓つて、大丈夫か？」

「大丈夫です。天下を治める器ではありませんが、善政をしき、家臣に恵まれ、また董卓様自身、心の強い方であられます。きっと私達を受け入れてくれますよ。」

あらあら、単福ちゃんがそう言うなら大丈夫か

「なら、俺達が誘導してあげないとな。殿は俺にまかせろつて」

「お一人ですか！？危険過ぎます！せめて村人の中から義勇を募つても…」

「村の人を逃がすのに、なんでわざわざ戦場に立たすのさ？大丈夫。本当にやばかったら逃げるから、それまでに単福ちゃんと皆が董卓んとこに着けばいい。俺は単福ちゃんを信じてる。」

「……………ごめんなさい」

「謝る必要なんかないよ。さあ、行った行った」

満面の笑みを浮かべておどけて言う  
あれ？これ死亡フラグ立ったか？

村人A「守りたい、この笑顔」

村人A黙れw

さて、遠呂智モードになるか

「聞け！黄巾の軍団がここに迫っている。貴様ら弱き者は去れ！我が時間を稼いでいる間、董卓の元に逃げ続けよ！この単福が案内しよう。」

こくり、と単福ちゃんが頷く

慌ただしくなる村人たち

そして少しの貯金とふくれた風呂敷包みを持って単福ちゃんと村を出ていった。

「お前は逃げないのか？暴力女」

「その呼び方は止める！」「いや、だってお前の名前知らんし…」

「そ…そうか…私は丁奉。字は承淵だ。さっきは妖術使いなんて言っつてすまない。あと、助けてくれて感謝している。」

丁奉オ！？丁奉と言えば、孫権の代に活躍して、山田…じゃなくて張遼を倒したりして孫呉の数々の戦で活躍した猛将じゃねえか！さっきの徐庶ちゃんといい、なぜか女の子になってるし！パラレルワールドGJ！

「ああ、気にするな。そこより話しも聞かずに殴ったことを謝罪しろ…んで、逃げないのか？ここは危険だぞ？」



「我が名は韓遂！お前か？程遠志の旦那を倒したって奴は？」

「いかにも。この遠呂智が切り捨てた。」  
「ばいっと程遠志の首を投げてやる」

「！間違いなく、程遠志殿ですね…私の名は波才！張角ちゃんと程遠志殿の為、あなたを倒します！」

「フタクな空気をだすポツチャリさんが波才か…俺じゃなくて曹操とやれよ…」

「あなたは遠呂智、と言うのですか？」  
と丁奉

「……………ああ」

「そついや丁奉には名乗ってなかったな…」

~~~~~

「皆さん、頑張つてついてきてください！諦めてはだめですよ！」

民の皆さんの足が思ったよりも遅い…早馬を董卓さんのもとへ出したらけど、間に合うかな…

遠呂智さん…あの人は間違いなく王になるべきお人だ。私は大陸を旅した。

幽州の公孫賛さん…勢力はあまり強くないけど、義に篤くい人だった。けど、趙雲さんという人以外は人に恵まれておらず、なににより王の器は持っていなかった。

冀州の袁紹さん…名門の出で勢力が一番だと思う。顔良さん、文醜さん、張コウさん、荀イクさんを初め、いい家臣をたくさんお持ちでした。けど、袁紹さん自身は暗愚だった。あれは子供と同じです。

揚州の孫堅さん…あの人は王の素質を持った人でした。周瑜さんと黄蓋さんも優れた人物でした。優秀すぎて、私の居場所がないと言

いますか、知をもてあますことになりそうで、偏見ですが、お断りです。

益州の劉璋さん…あの人はその…小さい女の子が趣味みたいで、私の貞操の危機が訪れましたが、ちょうどその時嚴顔さんに助けて頂いて、すぐに去りました…

寿春の袁術さん…袁のつく人は皆凡愚なんでしょうか？

そして、陳留の曹操さん…霸道に行く王の器の持ち主。家臣の夏侯姉妹も実力は確か。でも…霸道に私は賛成できない。曹操さんも…あの…女の子が趣味…みたいな噂を聞いて…ふわわ／＼／
その他、張繡さん、董卓さん、劉表さん等を見て回ったけど、私の気持ちは揺らがなかった。

諦めて、朱里ちゃん、雛里ちゃんと劉備さんところに行けば良かった…

そんなとき、遠呂智さんと会ったんだ。

敵に立ち向かう勇氣、民を守る義心、仲間に耳を傾ける気配り、一騎当千の武の持ち主。あの人が、この乱世に立つなら、私はこの身を捧げて力を尽くそう。

だから！

「死なないでください！遠呂智さん！」

遊星、仁王立ちする（後書き）

丁奉のモデルはF A E / ZEROのセイバーさんです

徐庶のモデルは強いていえばポケモンのカウガールでしょうかね。

逃亡戦って誰か仁王立ちした方が成功するよね(前書き)

長くあけてすみません

賈馱の馱はごんべんですが変換できないのでこの字にしています

逃亡戦って誰か仁王立ちした方が成功するよね

「ハアッ！」

「悲壮」を混ぜた気弾で敵を凍らせる。

「真空破斬！」

大きな横の薙ぎ払いが氷のオブジェと化した黄巾党を砕いてゆく

死体に情熱の気弾をたてて、埋まらないよう灰にしてゆく

死体の焼ける酷いにおいが黄巾賊の士気を下げる

波才なんかはゲロ吐いてた。そのゲロってる間に斬り捨てたけど

「敵将、討ち取った！」

「…波才ー！！」

「よそ見とは、余裕だな？韓遂！」

「ぐあ…しまっ…た……」

丁奉も韓遂の肩に一撃入れたようだ。もう一撃だ！

「瞬迅剣！」

高速の突きが韓遂を貫……。「ガキイン！」…かなかつた。

「韓遂！お前は下がれ！お嬢さん、この膠化が相手をしよう！」

「チッ！貴様もすぐに切り捨ててやる！」

おい丁奉…どつちが悪者かわかんねーぞ…

「ジャンプチャージ！」

「ぐああああ！」

あー、遠呂智つええww

見ろ、人がゴミのようだ！フハハハハハ！

丁奉もまだまだいけそうだ。足大丈夫かなあ…


~~~~~十徐庶サイド十

村を出発してどのくらいたっただろう…遠呂智さん…もうとっくに戦ってるんだろうな…ううん！大丈夫、遠呂智さんは死なない！

「あれ？あの旗は…」

前から迫る「呂」と書いてある深紅の旗につづく軍

そしてみるみるうちに私たちの前まで来た

先頭を走っていた2人が前に出てきた。

1人は赤い髪で、身長が高く、眠そうな目をしている。

もう一人は私と変わらないくらいの背に翡翠色の髪をした子

「あなた方が、黄巾の集団から逃げている者たちですか？」

翡翠色の子が聞いてきた。「はい、そのとおりです。！まさか董卓

さんの軍ですか！？」

「……月に、頼まれた。だから、黄巾の奴らを倒す。」

「そしてあなた方を助けるよう言われたのですぞ！」

「黄巾の軍隊がいるのはここから南の方です！そこで足止めをしてくれてる人がいて…お願いします！速く助けてください！」

「……ちんきゅ」

「はいなのです！恋殿、黄巾の奴らなぞ、ギタギタにきてきてください…」

そういつて恋、と呼ばれた人は軍を率いて遠呂智さんの所に行った

「都まで陳宮隊が護衛するのです！さあ、いきますぞ！」

~~~~~十遊星サイド十

「ぶるあああああああ！」

「ギヤアアア！」

鎌で首を一気に薙ぎ払う

「そろそろ死ねよっ！バケモ「俺の後ろに立つんじゃないじゃねええええ！」
ギヤア！」

「命が惜しくば引け…弱者に用はない！」

「廖化様！逃げましょう！かなうわけありませんぜ！」

「何？ここまでできて何を退けと意見する！」

「ふっ…周りをよく見るがいい。次の一撃で、貴様を葬ってくれろ」
丁奉がそう言った

廖化の周りにはもはや兵と呼べる者はほとんどおらず、武器を捨て逃げ始める者、腰を抜かし座りこむ者、死体と丁奉と俺しかいない。

「…くっ！皆引くぞ！」

廖化が皆に号令する

「退却だあ！逃げろおお！」

黄巾の奴らが次々去っていった

「今日の俺は紳士的だ…運が良かったな…」

「……………」

ふー

こうして、遠呂智は勝利したのであった…（勝利BGM）ってな！

ともかく、勝って良かったなあ〜

つか俺TUEE!

まさか時間稼ぐまでも撃退できるなんてね。

遠呂智様万歳だな

「やったな丁奉、お疲れ様。君も強いじゃないか！少し見直したぜ。

」

「…自分でも信じられません、勝ったなんて…」

「ああ、この勝利、この村の皆の命を救ったんだ。自慢できることだぞ。でも、流石に疲れたな…少し休んでから俺は行くよ…」

「あの…遠呂智？殿」

「何で疑問型なんだよ…遠呂智であってるぞ」

「その…1つお願いが…あるのですが…（もじもじ）
ぐはあっ！

可愛い！

頬に赤みをさして言いにくそうにもじもじするな…
すごく可愛い…戦いで疲れた心が癒えていく…

「ごうかは ばつぐんだ！」

「あ、ああ、んでどうしたの？…うっ可愛いわ…」
「やばい、萌え死ぬ…」

「私を、弟子にしてください！」

「あ？」

何何何？

俺の脳のスペックではオーバーヒートしてしまうぜよ…

「駄目…でしょうか？」

あああ！

そんな悲しい顔をしないでください

「なんで…いきなりそんなことを？」
「やっとなってきた言葉がこれだよ」

「あの…あなたはお強いですし、私のことを気にかけてくださったり…尊敬できる殿方といえますか…お慕いしてますと言いますか…」
「ん？」

今告白された気がしたけど、んなわけないよね
そんなエロゲみたいなこと…一刀でもあるまいしネ

「とにかく、私はあなたについていきたく思います！お願いします

「！またお側においてください！」

「いやあ、参ったな…」

現代での女の子と会話なんて小学生からないし…嬉しいっちゃあ嬉しいけどさ

「…好きにしなさいな」

「うわ…俺素っ気ないなー」

「せっかくフラグっぽいのが立ったのに…」

「ありがとうございます！私の真名は綾です！これからは綾と呼んでください！」

真名…その人にとってそれは自分そのものであり、許されずに呼んではいけない名前のこと…
って于吉がいつてた

「よろしく綾。俺の真名は遊星だ」

んま、遊星の名にそんな価値はないけど

遠呂智って言いにくくない？遊星って言われた方が嬉しいしね

「真名を頂けるとは…この丁奉、感激の極みであります、遊星様！」

「そんなかしこまらんでもいいよ、様もいらないうって！ん？あの旗は」

そんなコントをしていると「ト」...

と馬の走る音が村の後方から聞こえてくる

「まさか！新手ですか？」

「いや、違うよ綾。あの深紅の呂旗、来た方向からしてあれは董卓さんのところの呂布じゃないかな？」

まさか呂布が来るとは...でも少し遅かったねえ

はっ！いかんいかん、ここであれを叫ばないでどうする俺！

「りよ...呂布だあああああああああ！」

「.....？」

あー、一度言ってみたかったのよねえ

丁奉、そんな目で俺を見るな...

~~~~~

んで、呂布ちゃんに連れられ董卓のどこまで来た

呂布ちゃんがこれまた可愛い女の子でたまげたね。触角萌えww

「月...連れてきた...」

「恋殿ー！陳宮も、任務を果たしましたぞ！」

ガバツと呂布ちゃんに抱きつく幼女が1人  
へー、こいつが陳宮か

「遠呂智ぞああああん！」「おお！単福ちゃん、おっと！」

単福ちゃんまでガバツと俺に抱きついてきた。ちなみに鎧は解除してあるよ。

「わだじ、遠呂智さんのごとが…心配で心配で…ぐすっ…」

「ああ、もうそんな泣かないでいいから、大丈夫っていったら？でも心配してくれてありがとう。」

「ぐすっ…はい」

泣いた単福ちゃんも可愛いなあ…

「皆さん、よろしいですか？」

きれいな声にまとめられ、玉座を見ると月、と呼ばれた女の子がこちらに微笑んでいる

「私は董卓と申します。此度の乱、対応が遅れてしまい、申し訳ありません。」

「いいえ、董卓様の前で失礼しました。私は遠呂智と申します。」

「丁奉です。」

「単福と申します。此度の援軍、ありがとうございました。」

「此度の乱について、詳しく聞かせてください。」

そうして説明してみた

「んで、遠呂智と丁奉がすべて倒したというのか？」

「すべてと言うよりは追い払った感じですけどね」

華雄さんに答える

「大したものだな。無論、私にもできるが。後で手合わせしてこないか？」

「私のお願いを聞いてくれたら、手合わせしますよ」

「？なんやお願いつて？」

この人は山田…じゃなくて張遼さん。合肥でチートキャラになる人。

「董卓様、私を配下にお加えください。必ずやお役にたつて見せます！」

一瞬驚いた顔をした董卓ちゃんだけど、すぐに微笑んで

「はい。遠呂智さん。わたしの真名は月です。これからよろしくお願ひしますね」

「私は遊星です。月様。」



「遠田智…恋は恋。」

「遊星でいいよ。恋ってよんでいいの？」

「くくくくと頷く恋。かわいいなあ」

「うちは張遼。真名は霞や。よろしゅうに」

「陳公台なのです！ねねでいいですよ！」

「あと、詠ちゃん…賈馱さんがいるんですけど、今は出掛けていていません。」

賈馱…三國志の中で俺の好きなキャラの1人なんだよねえ。頭よすぎでしょアイツ。気になったらググってみてね。

「よろしく、皆」

こうして俺の董卓軍での生活が始まった…

騎士王への道 一章(前書き)

綾の拠点フェイズです

## 騎士王への道 一章

あのあと綾と単福ちゃんも一緒に董卓軍へ仕えることになって、2人とも俺の副将になった。

そうそう、単福ちゃんが、実は単福っていうのは偽名で、徐庶と言う名前だって本当にすまなそうにカミングアウトしてくれた。俺は知ってたけどさ。んで、真名も教えてくれた。麻里っていうんだ。

あと、あのあと賈栩と挨拶して、認めてもらった。真名は詠といういいツンデレだったw

んでその詠と協力して新しく遠呂智隊を結成した。なんとあの時の村人の大勢が入ってくれて、皆

「遠呂智さんと戦いたい」

「今度は俺たちが守る番だ！」

とか言ってくれた。

感動した。目の水門が破壊された。

んで今日は綾と遠呂智隊の訓練をしている

綾「展開！方矢陣！」

バツ

綾「気を付け！」

バツ

まだまだばらばらだけど、黄巾の奴等よりは負けないようにしないと

遠呂智隊といっても、そこから遠呂智親衛隊、丁奉隊、徐庶隊と分けている

遠呂智親衛隊

男：女

1：9

丁奉隊

男：女

8：2

徐庶隊

男：女

7：3

どうやって分けたか聞きたい？聞きたいだろ？

まず徐庶隊

これは簡単。ロリコンを発掘して入れただけ

ロリコン隊とでも言い換えようか。そいつら皆にロリコンのなんたるかを教えてやった。

俺「貴様らの心には常に！」徐庶隊「徐庶たんかわいいよ徐庶たん！」

俺「徐庶隊の掟！いつてみる貴様ら！」

徐庶隊「YES！ロリータNOタッチ！」

士気の高さはピカイチだろう

次、丁奉隊

これは義憤にかられて入った人々で結成した正真正銘の正義の軍隊。まあ、それだけじゃ数が足りないから綾に色目使ってる男どもも入れた。そいつらは俺がお話したから大丈夫だけど。

最後は俺の親衛隊。

まあ丁奉隊と徐庶隊の残りなんだけど。

男は3人しかいなくて、あと女性。これまた3人がなかなか有能で、ポツチャリと細マツチヨとくそでかい巨人みたいな奴。2mは軽く越してるな

ここで俺に電流走る。

そうだよ！俺は遠呂智なんだから仲間に妖魔が少しはいてもいいだろ？

ポツチャリした奴は蚊ミスチ

細マツチヨは百々目鬼トドメキ

デカイのは牛鬼ギウキと名付けた。

ゲームにちなんで蚊は剣を武器とする突撃隊長

百々目鬼は間蝶役のアサシン。武器は手甲。

牛鬼は大勢の敵をなぎはらうパワーキャラ。武器は碎棒。

とまあこんな感じ。皆には学問もして欲しいね。今度親衛隊だけでも塾を開こうか

~~~~~  
「皆知っているだろうが、俺がお前たちの教官の遠呂智だ。まずはお前たちに礼を言う。遠呂智隊に入ってくれてありがとう。」

「お疲れ様です遊星様。水は入りますか？」

「ああ！ありがとうございます。」

綾が持っていた水筒を取る
ごくごく…

「水ウマー、ありがとう綾」

「はい。ところで遊星様。私にも稽古をつけてくれませんか？」

「？綾はもう強いじゃあないか」

「いえ、遊星様のようにはいきません。どうすれば遊星様のように戦えますか？」

ああ、なるほど

俺の気の戦闘のことが

「気を使つんだよ綾。目の前に死んだはずの両親がいたら、どうおもつ？」

「驚いて…何より嬉しいです」

「だろう？目の前に両親を殺した黄巾がいたらどうおもつ？」

「怒りに身を任せ、殺してしまうと思います。」

「だろう？もし俺が死んだらどう思つ？」

「悲しいに決まっています！自殺するかもしれません！」

「うん、ありがとう綾。その気持ちを使って炎を生み出したり、氷を出すんだ。例えば…綾が黄巾の奴等に殺されたとする。その時俺は怒りと殺意に吞まれるだろう。この気持ちで炎の想像をする。そうすると…」

ボワッ！

「炎が…」

「これは人を殺せる。そおい！」

ドゴーン！

空中になげた火炎弾が炸裂して消えた。

「これを使いたいか？」

こくこくと頷く綾

「よし…まずは気を感じることから始めよう。はっ！」

「！！？…っ！！」

「今俺は綾に殺気をぶつけている。感じるか綾？」

「…はい。とても」

「殺気がなければ人を殺せない。ふう…」

「殺気が消えました…」

「ああ。まずは殺気を出せるようになって。綾。瞑想してみて。」

「はい…」

「今綾の手に俺の気を流す。それをまず感じるんだ。ふっ！」

「……………あっ！わかります。」

「この感覚を覚えるんだ。」

「はい…」

この間手を握ったままの俺と綾。何も知らない人が見たら勘違いしそっだ

なんだか恥ずかしくなってきた。

~~~~~十綾サイド十~~~~~

この間手を握ったままの私と遊星様。何も知らない人が見たら勘違いしそっ。けど、悪くない気持ち。この時間がずっと続けばいいのに。……………恥ずかしい／＼／

~~~~~

俺は手を離れた。

「さあ、集中して綾。今度は自分の中にある気を感じて。気の塊、気の手を想像して手で塊を掴むんだ。」

「……………」

~~~~~「よし…綾。いったん止めよう。」

「はい…はあ…はあ…」

「気の練習はかなり疲れる。休憩しながらね。」

「はい。なかなか上手くないですね。」

「そりゃそうさ。本来使わない能力だからね。少しずつ強くなろうよ。んじゃあもう一回。」

「遊星様：はい！」

その日から毎日綾は気の練習をした。なんと1週間で殺気をだせるようになった。センスがあったのだろう。

「じゃあ、新技覚えようか。名付けて魔神剣だ」

「はい！」

俺は剣をとる

「剣に殺気をのせて対象にぶつけるんだ。」

さてと…英雄になりたいんだ！父さんみたいな、すごい英雄に！

「走れ！魔神剣！」

ズバツ！

青白い気が地を走り消えた…感動するねえ

「なるほど…走れ！魔神剣！」

ズバッ！

綾も出来たようだ。素晴らしい。

「やったな綾。気の初歩は合格だ。」

「ありがとうございます。遊星様！またお願いします」

「本当にすごいぞ綾。よしよし」

頭を撫でてやる

「遊星様…お戯れが過ぎます…／／／」

真っ赤になってしまった綾。かわいいなあ

「炎とか、氷とかはもう少ししたらにしよう。まずは魔神剣を完璧にね。」

なでなで

「はい…あつう」

今日は綾との絆が深まったな（笑）

料理マスター徐庶 一章(前書き)

麻里の拠点フェイズです

料理マスター徐庶 一章

麻里は本当に頭いい。学園内でもけっこう成績優秀だった俺だけど、井の中の蛙ってやつよ。

というわけで麻里にこの時代のあれこれ、物のノウハウを教えてくださいつつ必死に生きてるよ。

「遊星さん！この前の試験でしたが…」

「あ！麻里先生。どうでした？」

「とてもよい成績です！少し難しいめに作ったのですが、良くできています。特に八門金鎖の陣の問題。全問正解です。」

まあ…それは知っていたからね…劉備に仕えた徐庶が夏侯惇や曹仁などの敷いた八門金鎖の陣を劉備に教えて勝利した徐庶屈指の名シーン。俺もそこで徐庶を好きになった。

「今度は孫子の兵法書を読み解いていきましょう。」

「うーん…理解できる自信ないんだけどなあ」

「遊星さんなら大丈夫です。私も頑張りますから！」

「そっか。頼むよ麻里」

~~~~~  
十 麻里サイド十

遊星さんに頼まれて学問を教えることになりました。今なら水鏡先生の気持ち少しわかります。

…先生今元気かなあ。遊星さんのことも紹介したいな

朱里ちゃんや雛里ちゃんも元気かな…

寂しくはないんだけどね。遊星さんや綾ちゃんがいるから楽しいしさて、今日の授業に行こうかな

遊星さんは覚えが早いから教えてても楽しい…

ってというのは表面で本当は遊星さんと一緒にいたいという気持ちが強い。

なんでだろう？一緒にいると体がポカポカして、とても気持ちいいもつと一緒にいたいのに時間はとても速く進んでしまう。

！そつだ！今度お菓子を作って遊星さんに持って行こう。
遊星さんどんなのが好みかなあ？

~~~~~

「今日の授業はここまでです。」

「あい先生。ありがとうございますた〜」

麻里の授業もかなりの回数になってきた

兵法は難しいけど、嫌いじゃないね。麻里っていつから勉強し始めたんだろ？つか麻里って何歳？12才くらいかな

「ねえ麻里。変なこと聞いていい？」

「？」

「麻里って何歳？」

「!?!?!」

「あー…答えたくないならいいんだけどさ…失礼を承知で言っただけだから」

「あの…何でそんなことを？」

「何で…？麻里に興味があるからかな？」

「ふわわ!?!」

しまった…ふわわ状態になってしまったぜ…

「あー…ごめんなさい」

「謝らなくてもいいですよ…嬉しかったですし…」

「え？なんか言った？」

「いえ！何も！18才です」

なん…だと…？

合 法 口 口 …

「許せる!?!」

「ふえっ!?!」

つい大声が…

「ああ、ごめん麻里。」

「いえ…あの、遊星さん！甘いものは好きですか？」

「甘いもの？うん、大好きだぜ」

「私今日…遊星さんにこれ作ってきたんです…どうぞ」

そういつて小さな包みをくれた。ん？この香ばしい香りは…

「胡麻団子かな？」

「はい…嫌いですか？」

「まさか、好物だよ。いただきます」

モグモグ…

！これは…

「どきどき…どうですか？」

「うまい！美味しいぞ！もう一個食べよう。もしかもしか」

「よかった…うっ…」

うん、マジでうまいな。

って…は？麻里何で泣いてんの？



「あの麻里？泣かないください！？俺超困るんだけど！？ごめんなさい！何だかわからんけどごめんなさい！俺のせい？俺のせい？」

「ぐすっ…そうです…遊星さんのせいです」

がーん…

少女を泣かせるなんて俺最低だ…鬱だ死のう…生きている価値すらない…

「もし…遊星さんが嫌な顔したりまずいって言われたら…と思っていて…嬉しくてつい…」

え？

あーなるほどそう言うことね。

「麻里。俺はさ、たとえこれが泥団子だろうとなんだろうと麻里が俺のためにくれたのなら、大切にすれば食べると言われれば全部食べるよ。泥団子でもね。」

「そんなこと…ぐす…しませんよう」

「うん。だからまずいとかそんなこと気にするなって言うことさ。つか麻里って料理上手いな。今後俺と料理しようぜ。」

麻里が知らない料理を食べさせてあげるよ。ほら、泣かない泣かない。

「…はい！」

ふー…こんな時、誰かに見られたら俺が悪者に見られるじゃん。女の子を泣かせたーって

「遊星さん」

「ん？」

「料理、約束ですよ？」

「はい、先生。」

こうして少しだけ麻里と仲良くなった…と思う1日だった

三顧の礼って特別でもないよね(前書き)

本編開始

### 三顧の礼って特別でもないよね

俺が董卓軍で働くようになってから二ヶ月が経った。

この二ヶ月マジで大変だったわ

でも以外と居心地悪くないね。美女いっぱいいるしw

ところでさ、丁奉が今の時季にいるなら、他の有名な将たちもいるんじゃない？

と思つて、百々目鬼を中国中に回してみた

まずは河内郡温県。司馬懿が生まれた場所なんだけど、やっぱり司馬家はあつた。

けど司馬懿本人がいなくて、なんとその息子であるはずの司馬師と司馬昭がいた。意味不明w。女だつて百々目鬼が言うからひっぱたいておいた。

次。麒麟児（笑）の姜維。やっぱり故郷にはいなかった。もう魏か劉備にいるのかも考えて百々目鬼を向かわせたけどいなかったみたい。まあ姜維を調べたのは興味本意で、仲間にしたくはないなあ。きつと北伐しまくつて兵力をぬるぬる減らすに違いねえ

つーか劉備を調べていたらなんと諸葛亮とホウ統がいた！早すぎねーかおい！

最後、トウ艾。こいつは仲間に加えたい。  
史実でも優秀な武将だしね地図とか作ってくれるはず

んま、二ヶ月じゃあれが限界かな？むしろ頑張った方だろ。

「遊星様、今日の政務です」「おはようございます、遊星さん。今日も頑張りましたよね！」

そんなとき綾と麻里が書簡を持って俺の部屋に来た。恋と華雄さんと霞があんまり机仕事しないから大変なのよねえw

おお…今日も書簡の山…

しよかんが現れた！

しよかんが現れた！

しよかんが現れた！

しよかんが現れた！

しよかんは仲間をよんだ！しよかんが現れた！

たたかう

たたかう

たたかう

たたかう

くそう…マドハンドもびつくりの増殖…

俺って責任感強いからにげるコマンドないのよねえ…あー、こんなときにこそ司馬懿とかトウ艾がいればなー

「麻里、司馬懿とかトウ艾って人知らないよねえ…」

「？トウ艾さんは知りませんけど司馬懿ちゃんは知ってますよ？遊星さん友達だったんですか？」

「そつだよねえ…知らないよねえ」

…は？知ってるの！」

「はい 私は荊州の水鏡女学院っていうところで勉強していましたけれど、氷里ちゃんはそこの学友です」

なんてこつた…

蛟ごめんww

「麻里、司馬懿ちゃんを仲間にしたと思うんだけど、案内してくれるか？」

「氷里ちゃんをですか！？確かに氷里ちゃんは何度か声をかけられたみたいで、そのすべてを断ったみたいです。まだ自分は知識が足りない、凡愚だと言ってわざとだらしない仕草をして。」

「そりや声をかけた奴が凡愚だから司馬懿ちゃんはそんな態度をしたんだろ？なら、そう思われなければいいだけさ。駄目かな？」

「うつ…あんまりあそこには戻りたくないですけど…わかりました。早く終わらせませすよ？」

「ありがとう麻里！そんな麻里が大好きだ！」

「！？あのその…ふわわ…」

ああ、照れる麻里かわいいなあ…

「遊星様！そろそろ政務を始めましょう！」

「そんなに怒るな綾。嫉妬する綾も愛してるぞ」

「嫉妬なんかじゃ…ありま…す…けど／＼」

恥じらう綾もかわいいなあ

~~~~~

んで月と詠に少しだけ休暇をもらって荊州に来た。なぜか詠に文句言われたけど

「へえ〜ここか、水鏡女学院つて。麻里、司馬徽先生によろしく言
つてきてくれ」

「ふわわ…はいい…」

なぜか怯えた様子の麻里が建物に入って行った

しばらくして麻里が出てきた。なんと留守らしい。

「しゃーないね…近くの宿に止まってまた明日くるかあ」

そう簡単に会いたい人に会うことは出来ないよねえ…ま、劉備よろしく三顧の礼でもさせてもらいますか…

~~~~~ 次の日

またいならしい。これはまさしく三顧の礼っぽくなってきたねー

麻里は…なんか知ってるなこりゃ

~~~~~ 次の日

いるのだが今は手を放せないらしい
昼寝じゃないだけマシかな？待っていていよう。

「あのさあ…麻里、俺に嘘ついたろ」

「ひえっ！？そんなことありませんよ？ふわわ」

「麻里、俺は嘘つく奴は嫌いだな…綾、麻里は俺を信じられないんだってさ」

「遊星様。綾はいつでも遊星様を信じています！」

「嬉しいこと言ってくれるね、綾。なでなで」

「！？／／遊星様…恥ずかしいですう…／」

綾の髪はさらさらで気持ちいいんだよね／なでなで

「じ…じべんなざい〜！私は遊星さんに嘘つきまじだああ！うつく…ひつく…」

「わかつてくれればいいんだよ麻里。よしよし…」

「ふわわ〜…遊星さん…ひつく…」

麻里の髪はふわふわでまたいいね。ナデポ

「女の子を泣かせるとは悪い人ですねえ」

おおっ、いつの間にかいた黒髪の美熟女。

「あなたが水鏡先生ですね？」

「確かに私が水鏡こと司馬徽といいます。この度は試すようなことをしてしまい申し訳ございません。」

深々と頭を下げる司馬徽先生

「いやあ、気にしないでください。でも理由は聞きたいですね」

「麻里があまりにもあなたのことを褒めるのでどうしてもあなたをはかりたく思いましたね。麻里ったら貴方に心酔していますよ」

「ふわわ〜／／／」

深々と帽子をかぶって顔を隠してしまった

「それはKOEIだね。んで先生、私は合格ですか？」

「もちろんです。普段はみだりに男性は入れないのですが、貴方はどうぞ。」

「ありがとうございます！」

in応接室

「さて、麻里からご要件は聞いています。司馬懿を連れていきたいのですね」

「まあ…その通りです」

「あの子は確かに学院1、2を争うほどの天才です。が、これまで何人も司馬懿を訪ねに来ましたが、だれも司馬懿の心は動かせませんでした。」

史実でも曹操が武力で無理やり士官させたしね。それまで引きこもりだったし

「今司馬懿を呼んでいます。」

~~~~~

コンコン

「氷里です」

「うむ、入れ」

「失礼します…！麻里ちゃん！どうしてここに？」

「えへへ…久しぶりだね氷里ちゃん」

「氷里。麻里との話はこれからいくらでも出来ますよ。今はお客様が優先です。」

「はい…！？男の人がどうして校舎に」

「私がお招きしたのです。わざわざ三回も貴方に会いに来たのですよ。」

「司馬懿さん、私は遠呂智と言います。会えて良かったです…」

紫の髪を長くのばして、黒のシルクハットを被り、背は麻里くらい。シルクハットに合うマジシャンみたいな格好をしている。黒のマントがカッコいいね

「私は司馬仲達です。どうも…」

「貴方に士官してほしいそうです。では私達はしばらく席をはずしますね。麻里はここにいた方がいいでしょう」

そうして先生と綾は出ていった

「さて…司馬懿さん、私の要件は今の通りです。私の仲間になってくれませんか？」

「氷里ちゃん…お願い！」

「……………」

ぐはっ…無言かあ

「ごめんなさい…私は誰にも仕えませんが…決めたくてです。」

「まあ…そうだよな…でも、決心するのは待つてくれないか？今から俺のことを知って、それから決めてくれ」

「…麻里ちゃん…この人知ってるの？」

「もちろんだよ氷里ちゃん！私のご主人様だもの！」

「え…？」

驚く司馬懿

それから俺と麻里は今までの出来事を話した

綾との出会い、麻里との出会い、黄巾との戦い、董卓軍に入ったこと、綾や麻里と修行したこと…

司馬懿は少なからず小さくリアクションしてくれた。

「私は絶対！遊星さんは天下を治められると思う。たとえ遊星さんが放浪しようとも、城に幽閉されようと、私が支えて助けます！」

「…っ！まりいっっ！」そんなに思ってくれたなんて…感動で脱水症状になりそうだ…麻里がふにゃふにゃになるまで撫で回してあげた

「…なるほど、貴方は本当に天に昇れる竜となりえるのでしょうか。麻里ちゃんの人を見る目は確かですし」

それはどうも…

「そこで貴方にお聞きしたい。この国はこれからどうなるとお考えですか？」

「もちろん、黄巾の乱の首魁、張角を私が倒し、やがては帝にのぼりつめ、私が王なり、漢を再生する！」

「そう…ですか…」

見るからにがっかりした様子の司馬懿

「と、でも今までの奴等には言われたかい？」

「え？」

「んなこと思わないよ、めんどくさい」

「ふにゃふにゃ…ふわわ」麻里、そろそろ戻ってこい…

「国を一つにはするけど、漢なんて知ったことか。そろそろ滅び時だろ？」

「…私もそう思います…大陸には野心家が蔓延り、皇帝の力はかなり低下しています。即ち、これは国の分裂が起こる兆しとも言えましょう。」

「そして分裂した国で起こるのは天下統一を目指す有力諸侯たちの戦争…漢は滅亡する」

「！……そう言ってきた方は貴方が初めてです。遠呂智さん」

「もうこの戦乱は避けられない。だからこそ、俺が一刻も早く時代を終わらせる！その為には司馬懿、君の力が必要だ！」

「ふう…失礼ながら、たかが董卓軍の將軍の一人でありながら、天下統一の志を秘めるとはおこがましくはないですか？」

「あははww確かにね。でも董卓はこの戦乱では生き残れないよ。それも近い内に消えるかもしれない。そこで俺が董卓を救い、新たな勢力としてこの大地に踏み出すつもりだよ」

「！？遠呂智さん何を？」

麻里は動揺しているけど司馬懿は

「ふふふ…あははは！」

…爆笑された

「素晴らしい理想ですね！理想をかかげ自分で自分は戦乱に立てる器をもっていると自負するなんてまったく凶々しい！凡愚にも程がありますよ！あはははw」なんかすごい馬鹿にされてるな俺…

「でも、貴方なら実現するかもしれない…そうも思いました…やっ

ぱり麻里ちゃんの目は間違ってますね。貴方に非常に興味がわきました。微力ながらこの司馬懿、貴方を支えましょう！」

「ありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

「姓は司馬、名は懿。字は仲達。真名は氷里です！よろしく遠呂智さん」

「遊星でいいよ氷里。よろしく」

「はい遊星。」

やったぜ…

司馬懿ゲット！これで勝てる！こいよ諸葛亮！

~~~~~その後先生と綾に司馬懿のことを言っ  
てなぜかお茶を頂いた。急ぎの用はないからいいけど。お茶ウマー

「せっかくですから、校内見学でもしませんか？」

「ああ〜いいっすね〜」

というわけで校内見学することにした

なんと食堂完備で保健室まである。まさに学校だなあ
そしてなぜか武術訓練場まであったしかも結構人いるし

「ここは武術訓練場です。遠呂智さん、武の心得は？」

「まあ…多少は」

「では手合わせ願います。」「え？」

「ですから、私と手合わせ願います。奈里、音里！」

奈里、音里と呼ばれた子が手をやめてこっちに来た

「遠呂智さんの武器は何ですか？」

「一応大鎌ですけど…」

「大鎌ですか…奈里、音里、武器庫に行つて羽扇と大鎌を取つてきてください」

「はい先生」

タツタツ…

「今の2人は…」

「姜維と向朗です。2人とも優秀な私の生徒ですよ」

ええ！あれが姜維！？

文武両道だったのは本当だったのか…

~~~~~「何でこんなことに…」

「さあ、準備はいいですか？」

普通の大鎌を渡された俺は白羽扇を構える先生と対峙している

つか羽扇つて戦えるの！？俺ビックリ

「試合…始め！」

あ、始まった

んじゃあガンガンいこうぜで

「やあっ！」



グオンと大鎌を振り下ろす

「遅いですよ！」

ひらりとかわす先生

「次はこっちの番ですね！光矢！」

「ぬおお！？」

なんと羽扇から光のビームが出た！  
いや、違うなこれは

「気の塊か！」

「よくお分かりになりましたね！もう一撃！散矢！」

「うわぁっ！」

ビームが三本も出た！

「逃げてばかりですか？武の方は残念ですね！」

「いやいや、俺の本気はここからですよ！……！」

遠呂智モード武装なし！

「我に挑め！」

さあ、行こうか！

狂気の宴 前編(前書き)

長らくお待たせしました

## 狂気の宴 前編

十麻里サイド十

「それでね……」

先生と遊星さんが見学してる間氷里ちゃんとおしゃべりしていた。

「なんだか騒がしいね……」

氷里ちゃんが呟く

すると近くの生徒の集団が急いだ様子で通りすぎていった。

「ねえ、何かあったの？」

生徒「訓練場で先生が男の人と戦ってるみたいなんです！それじゃあ！」

そういつて行ってしまった

「麻里ちゃん……これはもしかしなくても……」

「遊星さんですよ！私たちも行こう！」

~~~~~

「雷砲！」

手から雷を走らせる！

「当たらなければどうということはありません！」

先生は華麗にかわしていく

くそ〜遠呂智モードならいい勝負できてたのに…
つか先生強くな？俺が弱いのか？

「あの男の人：若干先生をおしてるよね？」
音里こと向朗が呟く。

「ふん！先生が手加減してるだけよ！男なんてクズでしかないんだから！」

何よ音里、あの男に興味あるの？」
奈里こと姜維が反抗する

「そんなことないよ…私は、奈里ちゃん一筋だよ…」
「当たり前ね！今更言わなくてもいいわよ。先生、そろそろクズを潰してあげてくださいーい！」

おい姜維…クズはないだろクズは
つかおまえらレズかよ…

「ごめんなさい…奈里は少し男嫌いにして…光矢・連！」
連続でビームが出てくる

「いえ、気になさらずに。私精神だけは強いので…効かぬ！」

鎌を振り回してビームを消す

「ではとっておきです！」

先生に気が集中していく

こりやまずいか！

「光連弩・乱舞！」

前方から大量のビームが迫ってくる！

しかもビームがさつきより太くて威力が桁違いだ…

「さしずめ無双乱舞か…どう切り抜けようか…」

~~~~~  
十氷里サイド十

かつてこの学院にも暴漢が入ったことがあった。

そのとき私達を守ってくれたのが先生で、暴漢は十数人いたんだけど、先生は無傷で追い払った。

このことで訓練場が作られた。危うく強姦されそうになった姜維は学院内1の武を身につけた。私も先生に誘われて羽扇での気術を習った。

けど姜維も、私も、全く先生にかなわなかった。

何故そんなに強いかわかったこともあった。先生は

「毎日のたゆまぬ努力。慢心しない精神。そして何より…」

「何より？」

「大切な人を守りたいという信念です。暴漢たちは己が欲のままに動いていたのでしょ。周りを顧みず、ただ踏み荒らしてゆく。」

そんな心に、私の信念は砕けません。あなたたちも、本当に守りたいと思つた相手が出る時がきます。」

そう言った。

そんな先生が今遊星と戦っている

實力は均衡：してない！？やや遊星のほうが押ししてる！先生は手加減している様子はない。

あの暴漢を追い払つた時と同じ光の乱舞を展開している…

「先生、そろそろクズを潰してあげてくださいーい！」

姜維が叫んでいる。

「むっ！遊星さんはクズじゃないです！」

麻里が怒つたように言う

姜維：あいつは気に入らない：私が麻里や音里と仲良くするとすぐに割り込んできて、引き剥がしてしまふ。

私は仲良くしてはいけないのか？その時姜維は嫉妬に満ちた目で私を睨んだ。麻里と真名を交換した時だ。あいつは私に墨を投げてきた。

あいつは同性愛者だ。それが暴漢がきっかけでもない真正の。独裁欲も強くて自分が気に入つた人物は自分だけに仲良くするようにしないと気がすまないようだ。だから私を邪魔者扱いする。自分の欲を他人に押し付けることも嫌い。

「！先生本気だね」  
麻里が言う

遊星の目の前には先生の光弩が大量に展開されている。

「これじゃあ遊星避けられないんじゃない？」

「大丈夫だよ…遊星さんだもの」

遊星だからって…どんな理由よw

~~~~~

考える！考える俺！どうしたら避けられる！？

地面に這いつくばればかわせるが、追撃をかわせない…

上へ高く飛ぶか？だめだ…やっぱり空中で追撃をかわせる自信はない…

ならどうする…走りながらガチ避けか？無理無理！シューティング
ゲーは苦手なんだ…

もういつそ動かないとか？

いや…までよ…姿勢が低ければ避けられる…！

「ひらめいた！」

秘技 マトリックス避け！

説明しよう！秘技 マトリックス避けとは膝から上半身を90度に
曲げ姿勢を低くし飛び道具を避ける技である！特に銃弾がかわせる。

ぎゃああ！ビームが目の前を飛んでゆく！あつ！鼻にかすつた…
しかしここは無表情に。グラサン欲しいな

先生「なんと…」

麻里「さすが遊星さん！」

氷里「ええええええ！」

姜維「はあああ！？」

ふっふっふ…この未来的回避術に驚きを隠せまい…

「大炎弾！」

炎の気の塊をすばやく作りぶん投げる！

「極光壁！」

なにい！？

炎弾が輝く光の壁にかきけされた。けど…

「……光撃と極光壁は…私の大技…はあ…もう私は気がありません
…私の負けです…はあ…疲れました…」

気の量には限度がある。あんな大技連発したらそりゃフラフラになるよ…

「「ありがとうございます」」

うーん…静かな勝利ってあんま嬉しくないな…

「先生大丈夫ですか？けっこう身体辛いんじゃない？手を貸しますよ？」

「あら、ふふ…女性への気遣いも持つてらっしゃるのね…もっと早く出会いたかったわ」

「え？先生独身なんですか？こんなに綺麗なのに」

「誘っているのかしら？乗りたいのは山々だけれど、あの2人に私達、殺されてしまうわ」

「遊星様！目的ははたしたはず！早く帰りましょう！」

「どうせ私は先生みたいに魅力ないですよー」

綾ってばけっこうヤキモチ焼きなのね…麻里は拗ねるなっ！麻里もかわいいよ！

「ふふっ…麻里も氷里もいい人に出会えましたね…」

~~~~~

「ほら言ったでしょう！遊星さんは負けません！」

「すごいね遊星。麻里ちゃん、こんな人めつたにいないよ…」

「当たり前だ。遊星様は遊星様しかいない!」

「皆褒めてるんだよな?」

なんだかまた俺の株が上がったようで。  
そうそう、いい忘れた。

(見たか姜維!悪口取り消せ!)

と心の中で言った

って俺の前に姜維!聞こえてないよな…

「……………」

あの〜姜維さん?

「……………麻里」

「へっ?……………奈里ちゃん…」

みるみる顔が青白くなる麻里

何々?あれか?同じクラスにいるけど全く歯車があわない感じ?

「やっと…帰ってきてくれたんだね…」

「っ!」

「私は感激だよ麻里。黙って私の前から消えたことは許してあげる。私って心広いし。でも、もつずっと一緒にだからね…?」

「ひっ…」

うん?意味不明だ。

「麻里、どういう関係?」

「誰の許しを得てその名を呼ぶ汚物!はやくここから消えろ!」

…オウ、マイガー  
俺なんかしたか?

「ん?何、氷里」

くいくいと俺の手を引つ張る氷里

「姜維は…同性愛者で、麻里ちゃんに惚れてるんです…」

ああ、成る程…だからあんなセリフが

「あのね、奈里ちゃん、私は…」

「何も言わなくてもいいよ もう気にしないから」

「麻里って女の子好きだったの?俺はそんなこと気にしないのに」

ホモとかレズは現代でいろいろ読んだからな…

「ち…違いますよ！私は男の方が…（遊星さんが）好きです！」

「そうなの？」

「んなわけないじゃない汚物。私と麻里は恋仲よ」

「って言ってるけど？」

「恋仲なんかじゃありません…奈里ちゃんの思い違いです…」

「え…？そんなわけ…」

「んー？つまりこういうことかな。

姜維の一方的な愛は麻里を困らせている

しかし姜維は麻里を恋人だと勘違いし両思いだと思ってる

姜維は魔性の百合

であってる？氷里」

「はい。」

「残念だったな姜維。麻里はお前の愛に答えられないってさ」

「奈里ちゃん、私好きな人がいるの…でね、この方に仕官したんだ。私はここにいてはいいかないの。奈里ちゃんと一緒には…いた

くないよ。」

麻里は力強く言った。

「よく言ったな麻里。よしよし」

「ふわわ……」

さて、これで終わる姜維じゃ……ないよな？

狂乱の宴 後編(前書き)

怒涛の新キャララッシュ

また長らく空けてしまい  
本当に申し訳ありません



少し挑発しとく

「お前は黙れ！存在する意味もないゴミが！さあ、麻里、行こう？」

「ぐすつ…行きません！奈里ちゃん…いいえ、姜維さん！

今日であなたと縁を切ります！私の真名は返してもらいますから！」

「……………は？」

俺が止めをさしてやろう

「理解できてる？あんたはフラれたの。麻里とお前は恋人でも、友達でもねーんだよ！」

「…………………………」

そっぴや先生、黙ってないでなんか言っつて…

「んぐぐ…んががが…キャハハハハハハハハ！」

なんかすごい音してんな

「そっか…そうだったんだ。麻里はこのゴミに操られているのね…？そっよ。私の麻里が嫌いっていうはずないもの…すべてゴミのせ



いなだね…音里！私の槍！」

「はいつ！奈里ちゃん…」

音里こと向朗が槍と鉄扇を引っ提げて現れた。

「まっててね…麻里。私が助けるから！」

姜維が槍を構え

「あのその…あなたに恨みはないけれど、ごめんなさい！」

向朗が鉄扇を構えた。

どうしてこうなった

「ケン力をお望みか…ならしゃーないな！」

手加減はしない！遠呂智モード！

「我に挑むなら…容赦はせん！」

「ふっ、先生と戦って体力を消費した今、二人がかりなら勝てる！」

「油断大敵だよ奈里ちゃん…」

「遊星様！私も…」

「綾、俺は麻里を守れと命令したはずだが？」

「……はい」

しゅん…となる綾

「心配すんなって。絶対負けないから」

「余裕こいてんじゃねーぞゴミがああああ！瞬迅槍！」

ヒュッ！

姜維の迫真の突きが俺の顔面にせまる！…けど

「遅い。おそすぎる」

ヒュッ！

綾の方が速いな

「手刀！」

バシッ

「な…に…」

ガキは寝てる…

ドサッ

そして姜維は意識を失った

「えいやあっ！」

向朗が鉄扇を振りかざし打ってくる

バシン！

「……………っ！」

痛ってええ！

モロくらい鉄扇なめてた…耳鳴りする…

「姜維は倒した。これで君と争う理由はない。武器しまいな」

「……………はい」

うん、向朗はいいこだ。

「さて…麻里、ふっ切れたか？」

「…はい！」

「先生、もう寝たふりはいいですよー」

「ふわーよく寝ました。んで、何かありました？」

こっし…

~~~~~

「それじゃあ先生。お世話になりました」

「いやですわ先生だなんて…真里とお呼びください」

「先生っ！遊星さんをからかわないでください！」

「ひどいわ麻里。冗談ではなくてよ」

「わかりましたよ、真里先生。俺の真名は遊星です」

「はい、遊星」

「遊星さんも！素直に交換して…全くもっ」

「そっは言っけどな…女性に親しくされて喜ばない男はいないんだぜ？」

「遊星って…けっこっ砕けてるよね」

これは氷里だ

「堅苦しいのも悪くはないけどさ、砕けてる方がお前らと仲良くなれるだろ？」

「遊星様はどんな遊星様でも素晴らしいはずです」

綾…こそばゆいからやめてくれ…

「遊星、横を向いてくれます？」

「？なんでさ先生。はい、横向きました」

「ふふ、これは親愛の印です」

ちゅっ

「!?!?!」

綾&麻里「あああっ!」

氷里「うわぁ…」

「またいらしてくださいね?今度は寢床で待っておりますわ」

「あわ…あわあわ…」

綾「麻里!ここには遊星様が危険だ!すぐに立つぞ!」

麻里「はい!馬はもう準備出来てます!遊星さんは固まってないで!ほら、急ぐ!」

氷里「それじゃあ先生。行ってきます。」

真里「はい、行ってらっしゃい。遊星に幸せにでもらうのよ」

氷里「別に私はそんな目で遊星を…」

真里「はぁ…氷里。あんないい人、大陸に10人もいないわよ。いつかあなたにも恋心が現れるわ」

綾「氷里!行くぞ!」

氷里「はい」

「っ待てええええええええ！」

「今度はなんだ……」

うんざりしたように綾がぼやく

「ぜーぜー……貴様ら……かひゅー……かひゅー……ゲホ……氷里をどこへ連れていく！」綾「どこといっても……氷里は私達の仲間になってくれんだ」

「キ……キキキス……接吻……はじめてのチュウ……」

「遊星様！」

「ゴフツ！」

くっくっく

誰だ！俺を殴りやがったの……

「遊星様。お客様ですよ？」

ほえ？誰かいたっけ？

「仲間ですって？笑わせないで。氷里はもう誰にも仕えないっていつてたわ。大方、弱味を握って無理矢理連れていこうとしてるんで

しょうけど、そうはさせない」

「というか、あんたはどちらさん？」

「貴方に名乗る名前はないわ。氷里を返しなさい」

そういうなりチャギン！と得物を取り出した。

！あの武器は…

「連弩砲…だと!？」

「なっ！なんであんたが知ってるのよ！まだ誰にも話してないのに！」

「わあー連弩砲だあ…あなたはもしかしなくても郭淮さんか？」

「そうよ！私は郭伯濟よ！なんで知ってるの…！」

「ふっふ…君のような美少女ツンデレキャラを知らないで人生終われるか！郭淮、お前俺らの仲間になれ！」

「なっ！」 郭淮

「遊星様…」 綾

「はあ…また遊星さんに女の子が…」 麻里

(つんでれきちゃらってなんだろう…) 氷里

「あらあら…」 真里

「私は丁奉。真名は綾よ」

「徐庶です。真名は麻里です」

「ええ、よろしく。郭淮よ。真名は練里」

「それじゃあ行こうか、練r（ドカン！）と！？何故俺に射った！俺じゃなきゃ死んでたぞ！」

「今私の真名言おうとしたでしょ？あんに許した覚えはないわ。次はないよ」

……（、・・・）シヨボーン

なんで俺だけだめなんだ…

こうして俺の心にすっかり矢は刺さったまま帰路についたのであった…

黄巾の乱 決着（前書き）

真里「作者さんから言えって言われたから仕方なく説明します

郭淮はツンデレキャラです。格好はミルキイなホームズかシャーロ
ツクなホームズの格好です。

要は探偵っぽい服装。

背は麻里や氷里より高く、中学生くらいです。

作者さんこれでいい？」

黄巾の乱 決着

「帰りが遅すぎよ！あんたが休暇の間どんなに私が…クドクド」

お城に着いたとたん詠のありがた（迷惑）いお説教。

マジ勘弁WWW

なんでまた俺だけ怒られてるんだ…

綾は

「遊星様の責任は私の責任でもありません！どうか遊星様を許していただけないでしょうか」綾く男にはどうしてもやらなければならぬ時があるんだよ」くっ！H A N A S E 氷里！私はまだ…」

というかんじで退場してしまった

「つまり！あんたが…」

詠はまだまだ続きそうだね…

~~~~~  
+ 氷里サイド +

綾と麻里に案内されて私と練里（郭淮）は城をみて回ることにした。

今のところ董卓軍はなかなか悪くないー諸候だと思う。私と練里がいれば尚更だ。でも遊星が言ってたあの言葉

董卓軍は生き残れない

これがどういう意味だかよくわからないが、とりあえず私は最善を

つくすまでだ。

「そしてここが私達の部屋です。あつちは綾ちゃん。そのとなりと向かいが氷里ちゃんと練里ちゃんね」

「麻里、この部屋は？」

練里が一部屋の扉を指す

「そこは遊星様の部屋だ」

綾が答える

「ふーん…入ってなんかいたずらしてやるっ」と

ニカツつと笑う練里

「え？でも鍵がかかってるはずですよ？」

麻里が言う。まあそうなんだけど…練里は少し違う

「ちっ…めんどろね…けど、こんな錠、私の敵じゃないわ」

そういつて懐から金色の鍵をとり出した

「最後の鍵」といって、どんな錠前でも扉でも鉄格子だつてはまずせ  
るんだって。前に得意気に話していた。

カチャ

「よし！開いた！」

「ええええええ！まずいですよ練里ちゃん！」

「そうですよ！勝手に部屋に入るなど…」

麻里と綾はとがめるけど

「あたしはどうでもいいけど、遊星の部屋、入ってみたいくないの？  
あたしはどうでもいいけど」

練里ちゃん…入りたいんだね

「それは…そうだが…」

「ふわわ…遊星さんの…私室…」

2人も撃沈した

「もういいよ皆。皆ではいりましょっ」

私も興味はあるしね

~~~~~  
「なかなか綺麗に整頓されてるね」

「ふん！つまらないの！」

「遊星様の匂いがする…幸せだ…」

「ふわわ〜」

それにしても…よく整頓されてる。いろいろ奇妙な物があるけど…

「ねえ、この古紙を山みたいに折ったのは何？」

綾に聞いてみる

「それは針戦ハリセンというらしいです。なんでもツツコミの威力が違うとか」

意味がわからない…

「これ…綾と麻里よね？」練里が棚の上の置物を指した土か何かで作られた綾と麻里にとてもよく似た人形があった。

「良くできてるね。色も綺麗に塗られてるし」

「60点ね。私が作った方が上手いけど」

~~~~~

ふう…

やっと説教終わった…

途中で月が助けてくれて、本当感謝感激雨あられってね

「詠ちゃん、久しぶりに遊星さんに会えて嬉しかったんですよ」

なんて月に言われた時は思わず萌えた。萌えつきた。とりあえず部屋へ帰ってゆっくりしよう。

ああ、そうだ。氷里と郭淮が仲間になったから新しくねんどろいど司馬懿とねんどろいど郭淮を作ろう。

美少女をねんどろいどにしなくてどうするんだ！って思い立ってさいろいろ資料集めを頑張ったよ

粘土は比較的楽に入手した。大変なのは塗料だったね。絶妙な色にするのにどれだけ苦労したか…  
ん？なんであいつら俺の部屋にいるんだ？

「良くできてるね。色も綺麗に塗られてるし」

そうだろそうだろ？もっと褒めてくれ

「60点ね。私がつた方が上手いけど」

「いつてくれるな郭淮」

「なっ！あんたいつの間に！」

「お前たちが俺の（ねんどろいどの）綾と麻里に手を着けた時からだ」

「遊星様の…」

「ふわわ…遊星さんってば大胆ですよ」

なんでおまえらは照れている…

「なんだ郭淮。うらやましいのか？」

「んなわけないでしょ！」

「心配すんな。ちゃんと氷里とお前のも作るつもりだし」

「やめて。寒気がするわ」

「素直になれよ郭淮。ほら、撫で撫でしてやるぞw」

「死ねっ！変態！」

「酷いねえ郭淮よ。んじゃ氷里おいで」

「いえ、私は結構ですから…」

「恥ずかしがることはないですよ氷里ちゃん。いいなー」

「……………では少しだけ……………」

「ちよつと氷里！」

「H A H H A A！氷里は素直だからな〜ほれ」

シルクハットをとって髪を撫で付ける

氷里かわい〜異世界サイコー。左茲と于吉ありがとう

「……………ほう……………」

うつとりしてきた氷里。やばい、何か目覚めそうだ…

「いい加減にしなさいよっ！」

バシン！

「あべしっっ！」



郭淮のやつ…ハリセンで叩きやがった…痛い…

「痛いよ郭淮…」

「ざまあないわね変態。氷里！目を覚まして！」

「にやわわ…はっ！私は何を…」

「あの変態に触られてたのよ！ほら帽子かぶって」

「そうでした…遊星、もつと！」

かわいい！氷里かわいい！もうロリコンでいいや

「駄目ですよ氷里ちゃん！遊星さんのお役にたったときご褒美として撫でてもらえるんですから！」

「ふーん…そうなんだ…」

「っ！お前のせいで氷里があっ！氷里を返せっ！」

バシバシ

「痛い！痛いよ郭淮！ハリセンやめろ！」

~~~~~俺がフルボッコされてから数日

遂に黄巾党と決する時が来た。張角、張梁、張宝率いる本隊と戦っていた官軍のが前線を離れてしまったため、俺たち董卓軍がかわり

に前線にでることになった。

んで、俺たち遠呂智隊は初陣だ。皆の活躍に期待しよう。

氷里は丁奉隊の副将に、郭淮は俺の副将にした。

蛟、百々目鬼、牛鬼も参戦させる。きつと100人斬ったり敵将とると「破壊の限りを尽くしましょうぞ！」とかいつてくれるに違いない。言わせる。

さてさて、この本隊を攻撃しているのは俺たちだけじゃあない。河北の曹操、冀州の袁紹、幽州の公孫賛、その義勇兵の劉備、揚州からの孫策などなど
んま、てきとーにやろうぜ

「って訳だ。策はいらないだろ。戦場の空気に慣れてくれ」

「綾は、遊星様をお守りするのみです」

「期待してるよ綾」

「緊張してきました…」

「大丈夫。隊の皆が麻里を守ってくれる。麻里はいつもど通りに」

「私、武はあんまり…」

「先生直伝の羽扇術なんだろ？氷里ならいける。心配だったら綾や俺と一緒にいな」

「なんで私があんたの副将に…」

「郭淮、俺はお前が一番心配だ。俺のそばを離れるなよ…」

「な…何よ…見てなさい…将の2人や3人、軽く撃ち抜いてやるわ」

だといけど…

~~~~~黄巾の乱+始まりの鐘+

勝利条件

張角、張梁、張宝の撃破

敗北条件

董卓の敗走

味方軍

敵軍

+董卓

+張角

+遠呂智

+張梁

+一刀

+張宝

何進

張曼成

袁紹

廖化

曹操

裴元紹

孫策

何義

劉備

劉辟

夏侯惇

馬元義

呂布

趙弘

張遼

管亥

夏侯淵

黃邵

周瑜

陳宮

賈栩

諸葛亮

黄蓋  
陸遜  
関羽  
張飛  
趙雲  
許楮  
丁奉  
徐庶  
司馬懿  
ホウ統  
張コウ  
公孫賛  
顔良  
文酬  
華雄  
荀イク  
皇甫嵩  
朱俊

~~~~~いやはや、メンツやばいねwww黄巾  
党オワタw

百々目鬼からの情報で、光を反射する見たこともない服をきた男が
曹操軍にいたそうだ。

間違いなくあいつだな…ここであいつを死なせるわけにはいかない
けど、曹操がいれば大丈夫か

「皆さん、無理はしないでくださいね…」

月が心配してくれるとは…お兄さん頑張っちゃっつよ？殺っちゃっつよ？

「はい！月様の為頑張ります！」

「月の為や、やったるで！」

「……………頑張る」

「この遊星お兄さんに任せなさいって」

「そんなおちゃらけると、足元すくわれるわよ？」

「何、気にすることはない。死んでも月と詠は守ってみせるぞ」

「なっ…ふん！期待しないでおくわ」

「厳しいお言葉…」

「ほんなら皆、出陣や」

霞の一言で皆ぞろぞろ陣を出ていった

さて、俺も戦闘準備しないとね

「……………遊星」

「ん、何？詠」

「……………ホントに死なないでね」

「…心配すんなって、生きて帰ってきてやるからさ。帰ってきたら一緒に食事でも行かない？」

「な…うるさい馬鹿！早く行ってきなさいよ！」

「はいはい」

さつてと、死亡フラグもたてたし、いざ、出陣

~~~~~先陣の華雄が戦闘に入ったみたいだ。

左翼に霞、右翼に俺ら、本陣は恋が配置している。

遠呂智モード！

「左翼と合わせ、前線を押し上げよ…弱き者共を残らず踏み散らせ  
！」

「はっ！進軍！進軍！」

俺の遠呂智モードの喋りにも皆慣れたようで、俺が遠呂智になると皆表情が一気に真面目になる。スイッチの切り替えの出来る人間に育成したからね。

「遊星…どうしちゃったの？」

「ああ、氷里たちは初めてだな？あの遊星様は。戦闘や訓練になるとたちまちあのようになる。それが私達の気持ち切り替えさせてくれるのだ」

「少し怖いけど…いつもの遊星さんより頼もしく感じますよ」

「なんなのよ…あいつ」

「郭淮、お前は人を殺す覚悟はないだろう？」

「……………」

「敵とぶつかるまでに覚悟することだな。ここは戦場だ」

俺が一番郭淮を心配する理由

それがこれだ。避けては通れない道だぞ？んま、少し助けてやりますか

おっと、敵さんのお出ましたね

旗は…「廖」と「趙」。廖化と趙弘か。そのはるか彼方に「張」の旗。あそこか、張角さんは

「悪しき蒼天の愚者どもに！天の裁きをおお！」

www

いかんいかんwnなやついるわけないってw

「遊星様、敵が突撃してきます！」

「鶴翼の陣をしけ！死ぬことは許さぬ！生きてくば、斬れ」

「遊星様に手出しはさせん！」

「凡愚どもが…滅してくれる」

黄巾兵「あつちに女がたくさんいるぞ！やつちまえ！」

あらあら、こつちにたくさん兵がなだれ込んできたね。好都合好都合。

郭淮、逃げるなよ？

~~~~~十綾サイド十

廖化「お嬢さん、また会いましたね」

綾「また貴様か。今度こそその首を跳ねてやる！」

廖化「まあ落ち着きなよ。俺は君の虜となった。その満月のように輝く君はまさしく俺の伴侶にふさわしい。どうか、俺と一緒になつてくれないか？」

綾「勝手に決めるな屑。私には生憎想い人がいる」

「なんと！まさかあのときの大鎌をもっていたあの男か！」

「そのとおりだ」

「くっ！俺の女神の心を撃ち抜くとは…あんなやつより私のほうがカッコいいでしょう！」

花のように可憐で美しい貴女にふさわしいのはあんな石ころより「の俺！」

「貴様に褒められても煩わしいだけだ。それに加えて遊星様への侮辱！断じて許さん。そろそろ口を閉ざしてやる。」

「あの石ころ遊星つてのか…様付けを要求するとは傲慢な」

「魔神剣！」

「うわあっ！何するんですか!？」

「それは真名だ。訂正しても許さん。」

「真名？石ころに真名なんてないよ。それより俺の真名は嵐だ。これから嵐って読んでよな。君の真名は？」

「呼ばぬし、教えん！瞬迅剣！」

ガキン！

「くっつ！どうやら俺の腕つぶしをこそ望かな？いいぜ。相手になる！」

「お前はカットだあ！」

趙弘「そんな…俺の戦闘が省略されるなんて…」

敵将！撃ち取った…

蛟「破壊の限りを尽くしましょうぞ！」

決まったね…

~~~~~  
十練里サイド十

戦闘が始まった。左手にもつ連弩砲が凄く重たく感じる…今遊星が斬り殺したあの少し立派な鎧の男が趙弘だろう。

黄巾兵G「なんだ？こんなところにガキがいるぞ」

っ！黄巾賊…

黄巾兵H「へっへ…将来が楽しみな面だなあ」

黄巾兵I「俺らで使ったあとに売りさばくとしよっぜ」

ゲへへwとゲスい笑いを浮かべる賊ども…

殺さなきゃ…私の連弩砲ならこいつらを倒せる…

動いて…私の体…捕まったらどうなるか想像できる…そんなの嫌だ…助けて…

「射て、郭淮」

「え？」

チャキン！

遊星が連弩砲に矢を込めて正面の賊の頭に銃口を向け、

バアン！

私の手で発射させた

一瞬何が起きたかわからなかった

でも正面の賊の顔には穴が空いていて、ぐらりと倒れた

私は…人を殺したんだ

別にいけないことじゃない。戦場ですることは人殺しだ。

バアン！バアン！

他の2人も胸に穴を開けて倒れた

(作者より)

小さい子が初めて包丁を使うとき、親が子の手を親の手を重ねて斬るを手伝うイメージです。このとき連弩砲は郭淮がもっています  
(が、発射したのは遊星によるものです)

頭が真っ白になった。胃から込み上げるこの感覚は……「うつつ……  
おえ……」

あまりの気持ち悪さに吐いてしまった。

戦場だって分かってたのに不甲斐なくて、かっこわるくて

「うつつ……うつつ……」

涙が止まらなかった。

「……………郭淮」

「うつつ……ぐすつ……ゆーせい……私もう無理だよ……」

「何が無理なんだ？ いっぱい吐け、いっぱい泣け。それが普通だ。  
俺と一緒にいてやる。だから逃げるな、乗り越える」

「うつつ……うわあああ……」

はあ……こういう展開はめんどくさいから嫌なんだがな……

「…ふふっ、カツコ悪いわね、私」

「でも、これからかつこいい郭淮を見せてくれんだろ？」

「当たり前よ！あと許してあげるわ」

「？何が」

「私の真名よ。忘れたわけじゃないでしょ？」

「…ありがとう。それじゃ進むぞ練里！」

「言われなくても！」

黄巾兵「あの男がきつと大将だ！やつちまえ！」

「わーこわーいれんりたすけてー（棒読み）」

「バカにしてるの！？」

ズドドド！

連射した矢が黄巾兵を蹴散らした。

「死ねやおらああ！」

チャージー大衝撃波！

「ぎゃあああ！」

ふー、今日も吹き飛ばしたー 俺TUEEE

「我らのほうが優勢だ！そのまま蹂躪せよ！」

「おおおっ！」

~~~~~  
十綾サイド十

「なかなか達者な武をお持ちのようだ。お嬢さん、ますます惚れるよ」

「貴様に時間をかけてられん。次で決める！」

「廖化殿！伝令です」

「はあ？野郎は呼んでねーんだけど…萎えるわー」

「趙弘殿が討死！我が方壊滅的損害です！」

「報告！東より敵援軍と思われる軍勢あり、このままでは囲まれてしまいます！」

「はあーせっかく張角ちゃんたちと仲良くなれたのになー。でも死にたくねーし…仕方ないか。総員これより解散！囲まれる前に逃げる！」

麻里「出鼻は挫きました！皆で突撃します！」

「おおっ！」

「徐庶たんには指一本触らせんぞ！」

「死ねや年増が！」

「12才以上は消えるブタどもがあ！」

「YESロリータNOタッチ！」

黄巾賊「ひいっ！なんだこいつら！正気じゃねえ！」

十数時間後十

「私達の完全勝利です！ありがとうございます！」

「ああ、徐庶たんの笑顔……だ……」

「俺……死んでも悔いはないや……」

「俺もだ……」

「とれ〜」

「これからもよろしくお願いいたしますね皆さん！」

「はい！」

死者0、負傷者0であった

~~~~~

さてさて、俺達は大勝利したわけだが

「百々目鬼イ！」

「ハッ！」

百々目鬼には華雄さんと霞の部隊の動向を探らせておいた

「2人はどうなっている？」

「張遼殿は敵の数多く、いまだ決着がついていない模様。ですが優勢。時間の問題かと。華雄殿ですが…我らをおいて突出。前方にいる袁紹軍と共闘中なり」

はあ…袁紹軍に無礼働いていなきやいいけど…

「そうか。あともう一つ。俺らに近づいている軍勢は誰だ？」

「劉備とかいう義勇兵の一団なり。今は公孫賛の元に身をおいているといえます」

あん？劉備イ！？こりやまたたいそんな英雄がきたねえ

「わかった。引き続き天の御使いの監視を頼む」

「了解…」

「遊星〜！」



「おう、おかえり氷里。初めての戦場大丈夫だったか？」

「大丈夫なわけではないよ。怖かった…でも綾が敵将を相手してくれて、私も副将討ち取ったから、結構あっさり勝てたよ」

「副将討ち取ったのか！よくやったな氷里。えらいぞ」

ナデナデ

「にやわわ〜」

「遊星様。ただいま戻りました…」

「おかえり綾。また廖化が相手だったかww」

「はい…また討ち取れなかった…」

「廖化ごときにそんな疲れるか？」

「綾ってば、廖化に告白されたんですよ」

「おい、氷里！」

「ああ？告白う？まさか…」

「そんなわけないですよ！断りました！」

「そうだよな…あ、でも綾が本当に好きな男ができれば俺なんか気

にするなよ?」

「むっ…遊星様は意地悪です」

「?」

「遊星さん!」

「おう、麻里おかえりさん」

「遠呂智総帥に敬礼!」

「バツ!」

徐庶隊は俺が総帥としてそれぞれ階級がある。

「うむ。ご苦労大尉。首尾を報告せよ」

「ハッ!今回は初陣ですが、徐庶さんに群がる年増どもを粛正しました!」

「軍曹!敵の萌えブタどもに麻里は触られてないだろうな?」

「目に入れさせさせませんでした!」

「上出来だ。少尉!あらゆる罵倒の限りを尽くしたか!」

「ハッ!年増の更年期障害を促進させてやりました!」

「ご苦労!お前たちは次の段階にすすむ価値があるようだ」

「あの…遊星さん？」

「気にするな麻里。男は悲しい生き物なんだぜ？」

「??？」

「練里、おいで」

「?何よ」

「お前が撃ち抜いた中に趙弘の副将がいた。だから  
ナデナデ

「~~~~っ!//」

「頑張ったな…」

「うるさい…馬鹿」

その後、決着は曹操によってつけられ、張角たちは死んだということになった。でも俺は知っている。

曹操と一刀によって保護されたと百々目鬼が報告してくれた。  
ま、いいか。

「所でさ、張角たちって男？」

「おなごなり…（ふんっ!）ゴフッ!」

殴っ  
てお  
いた

## 騎士王への道 二章（前書き）

真里「えー、またまた作者にカンペ渡されたのでよんでいきまーす

今回は綾の拠点フェイズです

前話で劉備が少しいましたが、拠点フェイズでは関係ありません。

キャラの設定をおさらい

主人公 海藤遊星 男

身長190cm 体重63kg

遠呂智。勉強、スポーツ、家事、歌、喧嘩、会話術など下手といえるどころか上手いとまで言えるほどの実力をもつリアル出来杉くん。精神もつよい。この世界に入って兵法も知った。コンプレックスは一刀や及川よりも一回り不細工なルックス（でもイケメンでないだけで悪くない）。そしてオタクである。

好きなものごと

料理、チキン、エビ、タコ、キュウリ、唐辛子、カレー、猫、水泳、ニコニコ、絶対領域、徐庶（正史）、テイルズシリーズ、声優、遠呂智、ツンデレ

嫌いなものごと

裁縫、勉強、メロン、杏仁豆腐、犬、タバコ、他人の過去を探る人間、オタクを差別する人間、綾を馬鹿にする人間、麻里を馬鹿にする人間、氷里を馬鹿にする人間、練里を馬鹿にする人間、現代の女性

ヒロイン 丁奉 綾 女  
身長170cm 体重52kg

モデルはセイバー。騎士王。茶髪で赤のドレス鎧。宝具・柄玖珠刈刃唾が武器。でも見える。両親の仇として黄巾を潰すことが生き甲斐だったが遊星と出会い、黄巾を倒した後も遊星を守る騎士となることを決意。遊星と会う前は脳筋だったが遊星と麻里の努力により見事学問を習得。現在も勉強中。遊星が好き。得意なことは電撃戦と乗馬、焼き餅（遊星に限る）。ちなみに胸は（魔神剣！）……

好きなものごと

遊星、電撃戦、乗馬、猫、杏仁豆腐、クッキー、遊星の料理、遊星との鍛練

嫌いなものごと

虫、黄巾、蜜柑（小さい頃蜜柑を食べようとしたらそれが虫食いになっていたから）、妖術、卑怯なこと、裏切り、膠化、自分を馬鹿にする人間、遊星を馬鹿にする人間、遊星と親しくなる人間

ヒロイン 徐庶 麻里 女

身長（言っちゃダメですよ！）体重（うわなにをする麻里！やめろ）

はあ……はあ……私は先生なのに……

ヒロイン二人目。各地を旅し英雄を探していた時遊星と出会い遊星を天下の英雄と見定め遊星に従った。武器は撃剣で、短剣を大量にもっている。殺人ドールは使えない。

モデルはなし。カウガールな衣装。カウボーイハットがでかい。胸はCカップ（ハラワタをぶちまける！）ぷうっ！遊星が好き。料理と兵法が得意。また人を見抜いたり、何を考えているか悟ったりすることが出来る

好きなものごと

料理、甘味全般、犬、家族、遊星、真里、朱里、雛里、氷里、遊星の料理、クッキー

嫌いなものごと

幽霊、辛いもの、熱いもの、姜維、曹操、劉璋、遊星を馬鹿にする人間

ヒロイン 司馬懿 氷里 女

身長159cm 体重……知らないわよ

ヒロイン3人目。水鏡塾にいた所を遊星がスカウト。遊星を認め従う。モデルは怪盗キッド。ただし小さい。得意なことは兵法と政治。武器は黒羽扇。気が使える。塾にいたころ諸葛亮とライバルの関係にあった。でも親友。戦闘のとき性格が変わる。妹として司馬師と司馬昭がいる。Bカップ

好きなものごと

遊星（恋愛感情ではない）、真里、麻里、朱里（ライバルとして友達として）、練里、司馬師、司馬昭、冷たいもの、酸っぱいもの、

クッキー、遊星の料理、猫、読書

嫌いなものごと

姜維、苦いもの、犬、遊星を馬鹿にする人間

ヒロイン 郭淮 練里 女

身長164cm 体重49kg

ヒロイン四人目。同じく水鏡塾でスカウト。手先が器用でオーバーテクノロジィな連弩砲を作ってみせた。武器は連弩砲。得意なことは発明と用兵。遊星が好き。Dカップ

好きなものごと

遊星、犬、発明、遊星の料理、肉全般、蜜柑、クッキー、氷里、真里

嫌いなものごと

魚、殺人、戦争、病気、姜維、自分を馬鹿にする人間、遊星を馬鹿にする人間、氷里を馬鹿にする人間



## 騎士王への道 二章

「虎牙破斬っ！」

「まだ隙がでかすぎるよ綾。瞬迅剣！」

「がっ！」

あっ！まずい！

モロ入った！

「すまん綾！大丈夫か？」

「はあ…はあ…何ともありません…手を煩わせてしまい申し訳ありません…」

「そんなことないよ。並の人間なら倒れてるほどの鍛練してんだ。それより嘘はいけないよ。ここ、痛むでしょ？」

綾のお腹あたりを押す

「っ！〜っ！」

すごく痛そうな顔をする綾

「やっぱり…今日はこれで終わり。ゆっくり休みな」

「申し訳ありません…」

「反省するのはいいけど、し過ぎるのはよくないよ。じゃあ夕食でまたね」

まったく、綾は忠犬すぎる…

~~~~~  
+綾サイド+

はあ…私は本当になんなのだろうか…

廖化は討ち取れず、副将ですら斬れず、麻里よりも賊を倒していない。

あげくの果ては遊星様のご期待にさえそえなかった…こんな女では遊星様に相応しくない…振り向いてさえもらえない…氷里や練里の方がよっぽどいい。

…だめだ。遊星様も言ったではないか。反省のしすぎはよくない。明日こそ頑張らなければ…

夕食は遊星様の部屋で皆で食べることになっている。遊星様が「食事って皆で食べた方がおいしいよ。一緒に釜の飯を食べたやつはもう親友だ。これから皆で食べよう。これ命令ね」

とこの前仰られてからそうなった。(もちろん遊星様の手作りだノノ)

確かに遊星様、私、麻里、氷里、練里で食べる朝食、夕食は私の毎日の楽しみになっている。本当に遊星様は素晴らしいことをお考えなされる。

ということと遊星様の部屋の前まで来たのだが…

「んっ…やだ…まだふにゃふにゃじゃない」

「これからこんなになるんだよ。触ってみ？」

「きゃっ！うわぁ…こんなに熱くて硬くなるなんて…しかも、においもするし…信じられない」

「口に入れてみ？おいしいぞ？」

「そう…なの？じゃあいただきます」

………この扉の前では何が起こっているのだろう。遊星様と練里の声だ。いや、想像はついた。その…男女の営みにはいささか早すぎる時間だと思うのだが…

練里はもうその段階まで…正直羨ましい…

「あれ？綾じゃん。なにしてんの？」

とことこと氷里も来た

「ああ…氷里。その…入りずらくて…」

「？入ればいいじゃない」

「いや、まで！」

ガチャ

「ああっ！」

もうだめだ…空気が読めない女だと遊星様に嫌われる…

「おう、綾に氷里。いらっしやい。」

「あっ！氷里！これすっごくおいしいよ！」くっきい「って言うんだって」

「クッキーだよ練里」

…？いつもどおり中心に机があって寝台が乱れた様子はない…それに甘いにおいがする。

「遊星様、このにおいは…」

「ん？ああ、このクッキーのにおいだよ」

「くっきいですか？」

「うん。俺の故郷のお菓子なただけだね、このふにゃふにゃの生地を焼くとこんな感じに硬くなるんだ。さっきまで練里が手伝ってくれてさ」

…どうやら私は凄い勘違いをしていたようだ。

「……恥ずかしい／＼！」

「???変な綾だな。お菓子に恥ずかしがる女の子なんて初めて見た」

「ふわわ〜とっても甘いに匂いがします〜」

麻里も来たようだ

~~~~~

「ご馳走様」

おいしかった…遊星様は料理が上手い。

「んじゃ、皆で食べようか。クッキー」

「いただきます…」

サクッ

！甘くておいしい…

「遊星様！おいしいです！」

「ふわわ〜初めてのおいしさです」

「ん〜〜おいしい！」

「さすが私が手を加えただけあるわね。抜群の味だわ」



「いい速さだ。威力も上がってる」

そう言いつつ遊星様はすべての剣撃をかわしたり、いなしたりして受け付けない。

「なんとしても一太刀だけはっ！地碎衝！」

「はっ？地碎衝!？」

私の考案した技だ。遊星様は知らないはず。殺気を剣に込めて脳天から一刀両断する技だ。素振りしたとき地面を砕いてしまったからこの名にした。

「ぐっ！」

ガキン！

決まったが剣で受け止められてしまった。だが、このままへし折る！

「やばっ！剣が持たねえ！臥竜撃！」

「っ!?!ぐっ！」

遊星様のいきなり放った振り上げ拳が私の鳩尾を捕らえた

「っ！痛むが…大丈夫か」

鎧をつけていなかったら…

「剣にヒビはいっちなったな…びっくりしたよ綾。頑張ってるね」

「まだ…これからです」

そつだ。今日の課題は虎牙破斬を遊星様に決めることだ。

「決めてみせるっ！虎牙破斬！」

すばやく切り上げと切り下げを放つ技だ。威力は高いが、初段の切り上げをかわされると大きな隙ができてしまう。

「昨日と変わってないじゃん綾。空破絶風撃！」

一歩後ろに下がる遊星様。ここで昨日も避けられた。そして鋭い突きが襲いかかる！

「くっ！」

ぎりぎりの所で体をひねってかわし、後ろに下がり距離をとる。

「下がっちゃうの？魔神剣！」

「ぶっ！」



距離をとっても安心はできない。魔神剣で追撃を仕掛けてくる。

「ホラホラホラ、魔神剣！魔神剣！魔神剣！」

「やつ！…このままでは…」

魔神剣を放たれてはかわすのに精一杯で距離をつめられない…

………そうか！これなら出来る！遊星様に当てられる！

「地碎衝！」

ガン！

地割れで一瞬遊星様の剣が止まった！  
今だっ！

一蹴りで距離をつめ、剣撃を叩きつける

「考えたな…だが、地碎衝はもう効かないぞ…」

「地碎衝ではありません。虎牙破斬を決めて見せます！魔神剣！」

「くっ！」

魔神剣を剣で受け止められる。だが、それでいい。

魔神剣は気の塊だ。それを剣で受け止めれば、衝撃で手を止めてしまっ。

すかさず決める！

「虎牙破斬！」

「ぐあああ！やられたぜえ〜！」

あたった！けど…

「遊星様…真面目にやってください…」

「はっはっは！でも本当にやられたからな！虎牙破斬はもともと綾はできていた。そこからどう完成させるかを試させてもらったよ。合格だ。魔神剣からささず虎牙破斬を決める…奥義・魔神双破斬の完成だな」

「なるほど…では魔神剣と瞬迅剣をあわせれば…」

「奥義・魔神空破衝の完成だ。よくがんばったね綾」

「あ、ありがとうございます！遊星様！」

この時私は思った。いつか遊星様に恥じない騎士になってみせると。

「気の練習もしてね。奥義を覚えるには気がどうしても必要だから」

……気の練習

忘れていた…



料理マスター徐庶 二章（前書き）

はやくも拠点フェイズのネタが尽きてきた

本編のネタは大量にあるのに…

m 薄っぺらすぎるので飛ばしても支障ないですごめんなさいm ( )

## 料理マスター徐庶 二章

IN 厨房

というわけで

麻里と料理することになった

「どういう訳ですかっ！」

そう！そのツッコミ！それが欲しかった！

真面目に説明すると

「軍事食ってまずくない？」「なら作りましょうか」

これだけ。あ、じゃあさ、食材集めてきて。はい、ヨロシクウ！

というわけだ。ずらりと並ぶ食材たち。俺の本能が叫ぶのさ。こいつらを料理しろと！

「といっても、遊星さん何か料理思いつきましたか？」

「たりめーよ麻里。手伝ってくれ」

今日のゲストは恋さんです。試食係ね。

「……ゆーせい、うーはん」

ぐはっ！萌え死ぬ…

~~~~~

まず米をふかしてぺったんぺったん。

「ゴルディオーン！ハンマアアアア！」

「ゆーせい、うるさい…」

「そういえば袁紹さんとこの顔良將軍は金色のおおかなづちを得物としてました〜」

なん…だと…？

ぺったんしたあとは形を整え乾燥させてと

「これが俺の故郷の食べ物、餅だ。」

水さえあればいつでもどこでも戻して食べられる。最悪塩かければ食えるし、これはいけるはず。

「……もち、おいしい…」

餅に砂糖を練り込んで甘くした。団子感覚でいけるはず。大豆はあ

るから天然酵母で醤油をつくらう。たしか藁には天然の納豆菌もいるな。

はい次

この世界では鶏卵は食べないらしい。もったいない。というわけでニワトリを育てることにした。チキン！チキン！

三章につづく

はい次

小麦があるね。

パンにした。

イースト菌？こまけえこたあいいんだよ！

ここで俺の体力尽きる。

「すまない麻里…俺は休憩する…」

「は…はあ…」

というのは口実で、餅、パンから麻里がどう発展させるかを見たかった。

さて、どうなる…

~~~~~十麻里サイド十

これくらいで遊星さんが疲れるはずがない。おそらく私を試している。餅とぱん。これをどう発展させるかだろう。

餅。米の塊だが、もちもちとした食感や味もあってお腹いっぱいになる。今までの乾物やかたい米よりかなりましだと思う。ただ、遊星さんは美味しい軍事食を所望している。

うーん…

そうだ！胡麻をつけてみてはどうだろう。  
あんとも合いそうだ。

餅に胡麻とあんを塗り、ごま餅とあんこもちを作った。

恋「ZZZ…」

次はパン。これもこのままでもおいしい。日持ちもしそうだ。

試行錯誤の末、これもあまり自信ないものが二つつくれた。

1つはくるみパンだ。生地いきのみを入れたただけだけど、風味や味が格段においしくなった。日持ちもする。

二つ目は牛乳パンとも呼ぶべきしっとりしたパンだ。パンを作るとき謝って牛乳を大量に入れてしまった。しかし不幸中の幸いとも言うのか、通常より甘くて柔らかいパンができた。



……料理には自信あったんだけど、見慣れないだけでこんなに調理に苦戦するなんて…

~~~~~  
さて、麻里は上手くできたかな？

「よう、回復したぞ麻里。迷惑かけたな…ってどうしたの？」

「ごめんなさい遊星さん…私では力不足でした。おいさと軍事食に必要な特徴の両立は私の腕では不可能です」

しよぼん…とする麻里。

「不可能かどうかはともかく、作ったのなら見せてほしいな」

「ううっ…はい」

そうして俺の前に1つのお椀が出てきた

「餅を小豆と砂糖で煮てみたんです…甘くてたべやすいかと…」

ほう…まんまおしるこだね。いいにおいだ。

「でも砂糖は高級だし…」

「どれ、いただきます」

まぐまぐ

うまー！

あまー！

「うめー！麻里、他の料理は？」

「あ、はい。これです」

ん？あんころもちと胡麻団子が出てきた。
うまいー

「パンはどんな感じ？」

「あ、はい。これです」

「お？くるみパンと…この味は、牛乳パンか！」

もしかもしか

「うーまーいーぞー！」

「ふわわ…」

パンは完璧だ。現代のものとそう変わらん。スーパーのパンよりう
めえ

「よくやった麻里。食はいきる喜びの1つだ。兵士の皆も喜ぶだろ
う」

「でも何も無いって！自分に自信持って！なんなら徐庶隊の皆に振る舞うか？きつと涙と血を流して喜ぶはずだ」

「血ですか！？まさかそんなわけ…」

~~~~~  
IN 調練場

「あつまれロリコン共！」

「むっ！総帥の収集だ！徐庶隊集合！」

瞬く間に集まり整列した徐庶隊。うむ、訓練は怠けていないようだな

練里「何あれ…気持ち悪い…」

丁奉隊「そこに痺れる！憧れるウ！」

「おまいらのために麻里が食事を用意してくれたぞ。麻里に礼を言え」

「ありがとうございます！」「アリシヤス！」

「一生徐庶たんについていきます！」

「僕を徐庶たんのお父さんにしてください！」

「ほら、今から麻里がじきじきに配ってやるから並べ」

「サーイエツサー！」

その後徐庶隊は遊星の言った通り、感激のあまり鼻水を流し、味わおうとするあまり口内をかんで血を流し、美味しさのあまり涙を流した

### S3・シバキューブ・一章（前書き）

己の文才の薄さが身に染みて感じますフォンです…  
今回も2ページ…

真里「今回氷里の拠点フェイズだけど、本編にも多少影響するから  
飛ばさないほうがいいよ」

### S3 - シバキューブ - 一章

十司馬師サイド十

IN司馬家（氷里の実家）

「凜！凜んんんん！」

のっけから大声でごめんなさい。皆さん初めまして、私司馬師とい  
います。真名は氷華。今日少し前に姉様から手紙が届きました。姉  
様が水鏡学院に入学してもう数年。その間まったく言っていないほ  
ど連絡がなかった。

その事で私と凜は涙を滝のごとく流し、意地悪な司馬進や凡愚な司  
馬孚なんかは「やっぱりくたばったんじゃねwww」

「奴隷にでもされたかあ？うひゃひゃw」

とかほざきやがるから粛清してやった。

あ、凜っていうのは私の妹の司馬昭のことで真名が氷凜という。

しかし、その姉様からようやく手紙が届いた！はやく凜に知らさねば

「凜っ！」

ピシヤツと扉を開けるが

「ZZZZ…」

……やっぱり寝てたか

凜はやれば出来るがかなりの怠惰癖がある。

「凜っ！起きろ！姉様から手紙がきたぞ！」

「んー？姉上、おはようございます。今日もいい天気ですね」

「今日は曇りだ凡愚。だが今日の私は気分がいいぞ。何しろ姉様から手紙がきたからな！」

「ええっ！姉上から！？どつりぞ」

「うむ、では読むぞ」

~~~~~その数日前

IN涼州 遊星の部屋

「しちそうさまでしたー！」

皆で朝食を食べ終わり、これから午前中の仕事に移る

「では遊星様。兵の調練にいきます」

「うん。いってらっしゃい」

ちゅっ

~~~~~

最近はいってらっしゃいのチューをするようになった。立場が逆だ  
けど

俺も朝からいい気分。皆も嫌がってないから続けてる。（氷里には  
拒絶された）

でもその後必ず皆千鳥足になって柱や壁に数回ぶつかるから、やっぱりやめようと提案したところ、綾にはこの世の終わりみたいな顔されるし、麻里には泣かれるし、練里には矢を射たれた。(氷里は知らぬ顔で茶をすすっていた)

ガン!

あ、また綾ぶつかつたな

~~~~~

数時間後

「遊星」

「何さ氷里」

「手紙…ってどうかくの?」

……………は?

「いや違うの!一度も書いたことなくて…」

あ、なるほど

「んなもん自分が伝えたいことを書けばいい。拝啓ではじまり追記でオチをとる。そうすりゃ出来上がりだ。誰に書くんだ?」

「私の妹です」

「妹？なら普段喋ってるような口調で書けばいいと思う」

「なるほど。ありがとう遊星」

~~~~~

「こんな感じかな？」

「俺が見てもいいのか？」

「うん」

では…どねどね

拝啓

凜、華、元気？私は最高に元気です。

報告が遅くなったけど、私は学院を卒業したよ。かなり前だけど

やっぱりこの世には数えきれないほどの凡愚がいた。この世に失望した。私は誰にも仕えない。そうきめた。でもやっぱり凡愚もいれば、英雄もいた。

その英雄はわざわざ私のためだけに三回も会いにきたんだよ。笑えるでしょう？でもおかしな英雄さんは私の興味を引いたのよ？名前は遠呂智。

私は今その人に使えています。遠呂智は馬鹿で女たらしで顔もかつ

こよくないけど、強くて凛々しくて、料理がうまくて、一緒にいてから毎日が楽しいんだ。だから私は大丈夫。心配かけたならごめんなさい。

追記

英雄さんは涼州にいます

「……………」

「これが私の手紙よ？変かしら？」

「馬鹿はないだろ。女たらしはひどい！おかしなはいらないわ！」

「私に言わせりゃ麻里と練里以外はまだまだ阿呆よ。女たらしは間違ってるわい」

「手厳しいね…でもありがとう。氷里が俺をほめてくれるなんて」

「どういたしまして」

「たく、かわいい奴め」

~~~~~  
十司馬昭サイド+

師「ん何よこれええ！」

何と言われても…

「んまあとにかく姉上、姉様の様子が分かったからいいじゃないですか」

「冗談じゃないわ。私は涼州に行く。遠呂智に会って肅清しなきゃ！」

「いやいや姉上、今日も父上からお見合いの話きてましよう？流石にまずいかと」

「馬鹿にしないで凜。私は凡愚の性奴隷として生きるつもりはないわ」

「性奴隷じゃなくて奥さんでしょう？それに資金は」

「進と孚からこの前たくさんくれたわ」

くれたんじゃなくて恐喝したんでしょ…

「そういうわけだから凜、行くわよ？」

「はいはい、まためんどくさいことに…」

父上…ごめんなさい

私は物思いにふける姉上を見ながら遠呂智がどうという人物かを想像する

たぶん女たらしの部分姉上を変な方向に変えたんだろっなあ…姉上は姉様のことになると感情的になるし…

遠呂智…かあ。いい人だったらそのまま仕官しようかな？もうお見合いや進と孚からのゲスイ視線はこりこりだし、めんどくさいし

うわあ…姉上が武器の手入れを始めた。完全にやる気じゃない…めんどくさい…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7044y/>

真・恋姫†無双 OROCHI

2012年1月9日01時45分発行